

中世善光寺平の災害と開発

開発勢力としての伊勢平氏と越後平氏

Natural Disaster and Development in the Zenkoji Plain in Medieval Times: The Ise and Echigo Taira Clans as Development Authorities

井原今朝男

はじめに

①川中島平の洪水災害と御厨開発

②伊勢平氏による信濃・越後の所領開発

③善光寺周辺の土砂災害と用水路の再開発

④越後平氏諸流による信濃・越後の所領開発

⑤鎌倉期における京方御家人の活躍

むすびに

【論文要旨】

本稿は、長野盆地における大河川の氾濫原・沖積扇状地と山麓丘陵部という対照的な二つの地域における災害と開発の歴史を類型化する試みを提示するとともに、開発勢力に注目して中世社会の災害と開発力の歴史的特質を検討しようとするものである。

前者、大河川の氾濫地域では開発が後れ、ほとんど近世の新田開発によると考えられていた。しかし、近年の大規模開発による考古学調査と用水や地名を中心とした荘園遺構調査など総合的地域史研究によって、10・11世紀における古代の先行した開発が確認され、大河川の洪水災害のあとも、伊勢上分米を開発資本として投資・復興させつつ御厨に編成しようとする動きと、国衙と結んで公領として再組織する動向とが拮抗していたこと。その開発勢力として伊勢平氏の平正弘一門が大きな役割を果たしたことを指摘した。

他方、山麓丘陵部から扇状地一帯に古代の鐘鑄川を利用した条里水田が先行していたが、9・10世紀における土砂災害で鐘鑄川が埋没を繰り返す中で、国衙による条里水田の維持・復興が困難になり、院政期には後序の在庁官人を指揮しうる院権力と結ぶ開発勢力が鐘鑄川を復旧・延長し、周辺部の再開発地に松尾社領や八条院領を立荘していった。さらにその縁辺部の非条里水田地域では、鎌倉～室町期に御家人平姓和田氏や国人高梨氏が六ヶ郷用水という第二次的補足的用水体系を開削して新しい開発地域を拡大していく努力を繰り返した。この開発勢力として院の北面や女院侍として活躍する一方鎌倉御家人をも輩出した越後平氏諸流の存在を「京方御家人」という概念で把握すべきことを指摘した。

地域の開発景観が時代の変遷と開発主体の相違にもとづいて複合構造をなしていたといえよう。

はじめに

善光寺平では、1998年の長野冬季オリンピック開催にともなう地域開発で多くの発掘調査がおこなわれ、文化財調査と並行して長野市制百周年を記念する長野市誌編纂事業が実施され、『長野市誌 第2巻 歴史編 原始古代中世』（長野市 2000）がとりまとめられた。

その成果によれば、地理学の上で長野盆地と呼ばれる善光寺平は、大きく二つの地形区分からなる。盆地の南西部の川中島平一帯は、千曲川と犀川の大河川に挟まれた複合沖積扇状地と自然堤防・後背湿地が広がる。他方、盆地の北東部一帯は、戸隠山・飯縄山に続く西部山地に発する裾花川と湯福川・浅川など中小河川がつくる複合扇状地が山麓線に連続して分布する。

この二大区分が、荘園公領分布相の相違となっている。前者の川中島平には、平安時代から中世にかけて富部御厨・布施御厨・保科（長田）御厨・芳実御厨など伊勢神宮領の御厨と仁和寺領四宮荘・同石川荘や摂関家領英多荘などの荘園が設立された。後者の山麓沿の複合扇状地一帯には、善光寺を中心に国衙の後庁郷や漆田・市村・栗田・高田・千田郷などの公領が分布し、その周辺の山麓帯や扇状地に八条院領東条荘、松尾社領今溝荘、証菩提院領若槻荘、摂関家領太田荘、千田小中島荘など大規模荘園が分布していた。⁽¹⁾

この二大区分は災害相の違いでもある。前者の川中島平一帯では千曲川・犀川の大河川による洪水災害が頻発し、水害史の中でも寛保2年（1742）の「戌の満水」が洪水水位標に史上一位として刻まれている。一方、善光寺周辺の扇状地では、1985年の地附山の地すべり災害に代表されるように中小河川の土砂の押出しや地滑りによる土砂災害が繰り返されてきた。いいかえれば、善光寺平は、洪水災害と闘いながら御厨が開発・維持された地域と、土砂災害と闘いながら公領や権門領荘園が開発・維持された地域とに類型化することができるものとする。

本稿は、このように対照的な二つの地域における災害と開発の歴史を類型化する試みを提示するとともに、中世における開発勢力に注目して検討しようとするものである。前者の御厨地帯は、伊勢平氏である平正弘の関係者を開発勢力として捉えることができ、後者の公領・荘園地帯は、院権力とむすんだ「繁」を通字とする越後平氏諸流の一門を開発勢力として指摘できると主張することが本稿の目的である。この二つの勢力が院政期から鎌倉時代にかけて複雑な政治変動の中で歴史的にどのような動向を示し、在地における再開発とどのような関係を取り結んでいたのかを検討したい。善光寺平という一地域の災害と再開発の歴史が、院政や平氏政権・鎌倉政権との緊密な政治動向の中で展開され、これまで全く無視されてきた越後平氏諸流の歴史の一端を明らかにし、「京方御家人」の範疇が歴史分析に必要であることを提起できれば幸いである。あわせて、地域の開発景観が時代と開発主体の差異によって複合構造をなしていたことを指摘し、全国各地での災害と開発の歴史を地域史として描き出すための歴史的方法の探究にいくらかでも寄与できればありがたい。御批判をお願いしたい。

①……………川中島平の洪水災害と御厨開発

川中島一帯は、武田信玄・上杉謙信の川中島合戦の場として著名であり、一般にその立地条件から古代・中世には大河川の氾濫・洪水によって開発の後れた地帯と考えられてきた。江戸時代はもちろん近代においても、洪水災害の繰り返しであった。⁽²⁾しかし、近年の考古学的調査や荘園遺構調査によって、古代中世における千曲川・犀川の大洪水と開発の痕跡があきらかにされつつあり、これまでの歴史像の変革が要請されている。

1986年に刊行された『長野県史通史編2 中世1』では、文治2年(1186)2月日「関東知行国々乃貢未済莊々注文」(『吾妻鏡』)から、犀川上流の支流農具川・高瀬川に仁科御厨、万水川流域に矢原御厨、会田川流域に会田御厨、麻績川流域に麻績御厨、犀川・千曲川の合流地帯に富部御厨・布施御厨、千曲川支流保科川流域に保科(長田)御厨、鮎川流域に芳実御厨などが分布し、安曇・筑摩郡から更級・埴科・水内郡一帯にかけての中小河川流域に御厨が集中することを指摘した。⁽³⁾その後、富部御厨・布施御厨についての荘園遺構調査の成果は、1999年の長野県土地改良史編集委員会編『長野県土地改良史 第一巻 歴史編』に公表した。⁽⁴⁾

本章では、それらの成果に依拠しながら、文献史料を中心に発掘調査や現地踏査によりこの地域での洪水災害と開発の歴史を可能な限り整理し、その開発主体としての平氏一門の歴史的性格と伊勢神宮による開発資本の提供について検討したい。

千曲川流域の御厨と荘園

千曲川低地の条里水田については、弥生から古墳・奈良・平安・鎌倉・江戸など各時代の様相が発掘調査で判明しつつある。⁽⁵⁾その周辺に広がる川中島平一帯の古代の郷村は、「倭名抄」にあらわれる更級郡の「清水」「斗女」「池郷」「氷鉋」の四つが想定され、隣郡埴科郡の郷配置を含めて地域構造が検討されている。⁽⁶⁾これら古代の郷村の痕跡は地名などから探ることも困難が多く、洪水災害によって変貌が大きかったことを予想させるのみで、その多くを将来の発掘調査や考古学研究などに期待するしかない。

この川中島一帯に関する文献史料の初見は『中右記』である。長承元年(1132)から3年にかけて、長田御厨と芳実御厨の停廃をめぐる伊勢神宮と信濃国司の間で訴訟が起きていた。

「件所指たる本券無し、本領主源家輔、負物之代に譲りて禰宜常秀これを許す、国司国房為行二代、奉免すといえども、その後久しく公郷として国役勤仕す、仍って御厨となすべからざるか、御厨を停止すべし」(『中右記』長承元年11月4日条)

芳実御厨の地を開発した本領主は源家輔であった。彼は公田を含んだ開発所領を国衙から請負って相伝私領として寄進・売買することを認められた領主であった。その私領に賦課された伊勢上分米の支払いができず「負物の代」として禰宜常秀に所領を寄進し伊勢神宮の許可を受けた。11世紀末期の信濃国司であった源国房と嘉承2年(1107)に信濃国司に就任した高階為行の代に国免荘として御厨となった。しかし、「その後久しく公郷として国役勤仕す」とあることは、新任の国司が御厨を整理し、公領にもどったことがわかる。この地の開発が伊勢神宮による資本の投資だけで

はなく、国司や在庁側の力が関与していたことが、国免荘ともなり、公領に戻された要因にもなったものと推測されよう。これ以後、芳実御厨は史料上登場せず、鎌倉時代にはその故地は井上郷とよばれ国衙の管理下におかれた。木曾義仲や頼朝の御家人として活躍する井上光盛ら高井源氏の名の地である。在庁側の勢力が強かった地域といえよう。

隣接する保科付近一帯の長田御厨でも類似した事件がおきている。建久3年(1192)8月日の「皇太神宮建久已下古文書」⁽⁷⁾によると、この御厨は寛治2年(1088)に建立され永久3年(1115)宣旨によって外宮領となったと記載している。ところが、長承元年(1132)に停廃事件がおこされ、伊勢神宮側は代々国司による免除地であったと主張し、「御厨たるべし」との右大臣藤原宗実の意見を受けていた(『中右記』長承元年11月4日条)。長承元年に、鳥羽院や美福門院の院司で摂関家の家司でもあった藤原親隆が信濃国司になっているから、彼が国司として保科御厨の荘園整理に乗り出したのである。神宮側はそれに反論しようやく宣旨をえたらしい。しかし、国司側の介入は終わらず、その2年後には御厨の神人殺害事件が起きた。

「祭主卿言上す、信濃国外宮御厨長田、国司新立御厨と称して停廃せんと欲するの間、神人殺害せらるるの事、大略一同定むる也、御厨に至りては去々年議ありて御厨たるべきの由宣旨を下され畢、今に於いては左右あるべからず、神人殺害の事は注し申す所の下手人を庁官等、早く遣はし京都に於いて召し問ひ申す趣にしたがい沙汰有るべし、或は使庁に給い沙汰せらるべきの由定申さる」(『中右記』長承3年正月29日条)

ここから国司による御厨の停廃がおこなわれ国免荘としての性格が強くなり、長承元年の宣旨によりようやく長田御厨として立荘され、長承3年(1134)にも追認されたばかりであった。神人殺害の犯人は逮捕し京都で尋問し検非違使庁の判断とすることが決まった。

こうしてみると、11世紀末期から12世紀初頭におけるこの一帯の御厨群は、伊勢神宮の開発資本が入り御厨に寄進されたりしたが、国司側の力が大きく、荘園整理で公領に戻されたり、国免荘として公認されるなど不安定であり、両者間に武力衝突なども起きた。荘園・公領の両属関係を脱することができずに立荘による永続的な御厨として安定しえなかったことがわかる。この地域の伊勢神宮や国衙への両属関係の強さは、それ以前の11世紀にこの河川流域でも公田を含む所領の開発・請負が先行して公領の形成が進展していたことを物語っている。その時期については、文献史料がまったくなく、発掘資料に依拠しながら検討しよう。

10～11世紀の大洪水と南宮遺跡の消滅

これまで、中世史研究では山間地の谷戸田を中心にした小規模開発が先行し、東国では関東武士団による沖積低地開拓の技術と経験が浸透したものの、一般に沖積扇状地や台地は開発の後れた地帯と考えられている。この川中島平地域⁽⁸⁾でも11世紀の御厨や公領が設立される前段階の歴史が史料的にも空白期であり不明であった。しかし、近年長野新幹線や長野冬季オリンピックにともなう発掘調査がこの一帯でおこなわれ、長野市南宮遺跡・篠ノ井地区の築地遺跡・於下遺跡などが出現し、古代中世における開発の姿があきらかになりつつある。

南宮遺跡一帯は1998年長野冬季オリンピックの開閉会式場となったため、平成5年から8年まで発掘調査が実施され、6万2000m²という広い調査面積の中から、堅穴住居跡1,123軒、掘立柱

建物、柵跡、小鍛冶跡、土壌、井戸跡 28、溝跡 451 条などの遺構が出土した。遺物は土師器杯や椀、皿などが中心で、灰釉陶器の椀、緑釉陶器の皿、刀子、紡錘車などのほかに中国越州窯の青磁鉢や熙寧元宝など北宋銭が出土した。「宗清」銘の土製印が出ている。いずれも 10 世紀中期から 11 世紀後半までの時期の大規模集落跡であることが確認された。⁽⁹⁾

注目される第一は、遺跡内を通っている現用の大御堂堰の下部に大きな自然流の砂礫層が出土し、現在の用水堰が平安時代の自然流を継承していることがほぼ確認できた。大御堂堰はすくなくとも平安時代の自然流を継承して開削された古代以来の用水路であった。第二は、これらの大集落群が 11 世紀後半に千曲川の氾濫による土砂に埋没して廃絶していたことが判明した。犀川の洪水砂と千曲川のそれは粒子の細かさによって識別可能とされ、本集落群の廃絶はあきらかに千曲川の氾濫によるものであった。この集落跡に隣接して現在「東福寺」という地区がある。この「東福寺」地名は、応和年間（961～964）に建立された天台宗補陀楽山東福寺に由来するという口碑がある。⁽¹⁰⁾ 大御堂堰の「大御堂」地名も、平安時代この一帯に大寺院が存在していたことを物語るものとみてほぼまちがいない。地方寺院も千曲川の大洪水で村とともに廃絶した可能性が高い。

平安後期の千曲川の氾濫に関する文献史料として、陽明文庫所蔵『行親記裏文書』に「僧定寛書状」がある。この史料は水内郡太田荘のもので永治～久安年間（1141～50）に「前年大洪水による苧麻ことごとく流損」と記録している。⁽¹¹⁾ 太田荘の立地する豊野町は千曲川が善光寺平から流出する狭隘な排水口部分にあたっているため、現在でも滞水・洪水地帯となっている。この一帯が氾濫するときは、千曲川周辺では水位が高くなり、松代・屋代地区・川中島地区など周辺流域一帯が同時に洪水に襲われている。南宮遺跡の大集落を廃絶させた千曲川の大洪水が何年のものか特定することはできないが、その大打撃を受けたあと、12 世紀半ばの永治～久安年間にも千曲川の洪水災害がくりかえされたこととみて間違いない。この一帯が平安後期に千曲川の洪水災害に直面していたことは考古学的にも文献学的にも両面から確認されるのである。

以上のことから、沖積扇状地の川中島一帯は犀川のみならず千曲川の洪水災害がくりかえされていたにもかかわらず、すでに 10 世紀中期から 11 世紀後半には開発による住民の定着がすすみ大集落が成立していたことは明らかである。

11 世紀末期から 12 世紀前半に文献史料に登場する「本領主源家輔」は、こうした平安期の大集落の住人であったことはまちがいない。こうした大集落群を公領として編成しようとする国衙と御厨にしようとする伊勢神宮との紛争が引き起こされ、文献史料に記録されたのである。『中右記』に登場するこの地域の紛争は、こうした開発行為の結果であったことが考古学的に裏付けられたものといえる。ではつぎに鎌倉時代について検討しよう。

布施・富部御厨の開発と多品種複合生産

南宮遺跡が立地する長野市川中島町一帯には「御厨」「富部」「神明」などの地名が分布する。この一帯が文治 2 年の「乃貢未済莊々注文」に初見する富部御厨である。その西方の長野市篠ノ井山布施から篠井布施高田付近が布施御厨の故地であり、千曲川・犀川に挟まれた川中島一帯に二つの御厨が開発されていた。⁽¹²⁾ 南宮遺跡が千曲川の大洪水で消滅したあと、院政期から鎌倉時代にかけて、この一帯は再開発のために巨額な資本が投資されて富部・布施御厨となって再出発したのであ

る。では、その開発形態がどのようなものであったか検討しよう。

文治2年「乃貢未済莊々注文」で「布施御厨・富部御厨」、建久3年神宮雜書には「藤長御厨」(信史3-434)、南北朝期の「神鳳抄」には「二宮藤長御厨三百四十五町 同内布施御厨・同富部御厨百五十町」と記載されている(信史3-449)。伊勢神宮では二つの御厨を「藤長御厨」として登録しており、現地での呼称と中央での呼称とがズレていたことがわかる。こうした事例は、東国御厨を中心にして数多く確認することができる。

伊勢国大橋御厨	異名棚橋	醍醐寺文書 鎌 1527
武蔵国七板御厨	一名恩田	神鳳抄
信濃国長田御厨	一名保科	同
下総国夏見御厨	一名船橋	同
豊田莊	号松橋莊	吾妻鏡 鎌 60
三崎莊	号海上莊	円福寺文書
常陸国村田莊	号下妻莊	九条道家領目録
田中莊	号村田下莊	同
下野国寒川御厨	号小山莊	小山文書 鎌 3960
上野国利根莊	号土井出莊	大友文書 貞治 3/2 氏時所領所職注進状案
相模国吉田上莊	号渋谷莊	入来院文書 鎌 7874

これらは、幕府下知状や所領目録など公文書に登録されており、単純かつ恣意的に別称や異称が存在したという問題ではない。御厨・莊園の立券・莊号がどのように公認されたかという公称問題であり、東国莊園の特質として別途に検討しなければならない。ここでは、藤長御厨という異称がこの地域の特殊問題でないことのみ確認するに止めたい。

まず、この一帯の御厨がどのようなものを生産していたのか、莊園年貢の関係資料から検討しよう。建久3年神宮雜書の「藤長御厨」の供祭物として「内官方、上分布五十段、長日御幣料日別代布二丈、外官方同前、件長日御幣代布近年不究済之」とある。伊勢神宮の上分料は麻布 50 端、長日御幣料日別代として布 2 丈(約 20 尺 = 6 m)であった。年貢の中心は苧麻を原料とした麻布であった。隣接する麻績御厨について「神鳳抄」は

「□分鮭百五十尺同兎一桶、搗栗一斗、干棗一斗、口入料六丈布六十段四丈布十六疋、鮭三十隻同兎一桶」

とある。千曲川・犀川の支流である麻績川で鮭や筋子が取れ、麻布も納入された。外官領長田御厨では「上分四丈布二百端神馬二疋雑用布百端」とある(信史3-449)。麻布と馬が生産されていた。御厨からの年貢物は、麻布が一般的であり馬、鮭、筋子(鮭兎)、搗栗、干棗などであった。これらはこの地域の現地生産物と考えられる。

『一遍聖絵』によれば、善光寺に至る犀川流域では河川の乱流にそって川原田や畑地が分布するとともに、中州を利用した牛の放牧の景観が描かれている。大河川の乱流と沖積扇状地での中世の開発は、洪水災害との戦いでもあったから、水田とともに、里苧麻の栽培、牛馬の放牧、薬での鮭・筋子などの漁撈、棗など果樹栽培という多品種・複合的農業であったことがわかる。千曲川や犀川は定期的な氾濫の川であるが、無数の浅瀬では薬がかけられ鮭や筋子が取れる豊かな川であった。

周囲を川に囲まれた中州という地形的条件が牛馬の放牧の適地であった。水捌けのよい砂礫層が果樹栽培に適したことは現在も同じである。洪水災害は決して中世における沖積扇状地や低湿地での開発の障害とはなっていないことに留意する必要がある。

布施・富部御厨の荘園遺構調査

現地での荘園遺構調査は『長野県土地改良史 第一巻 歴史編』に公表したので、その要点のみ整理しておきたい。図1の布施・富部御厨の荘園遺構図を参照されたい。

まず、川中島の複合扇状地から西山山麓一帯がそのまま布施・富部御厨となっている。これらの郷村には数多くの伊勢神明社が勧請され、岡田神明社（篠ノ井岡田）、信里神明社（長野市信更町）、山布施の布施神明社（篠ノ井山布施）、富部神明社（篠ノ井富部）、小松原神明社（篠ノ井犀口）、横田神明社（篠ノ井横田）、杵淵の岡神明社（篠ノ井神明）がいまも存続している。

布施・富部御厨の両厨一帯を灌漑する上中堰と下堰の取水口は、長野市篠ノ井小松原にあり、時代とともにその場所を変えているが犀口と呼ばれ、そこに布施神明社が祭られている。この神社は堰口を守護する水神として信仰されている。この川中島上中下三堰は、松代城代の花井吉成・主水正義雄父子の開削と伝承され、その背後に大久保長安の関与があったものと推測されている⁽¹³⁾。

しかし、その原型は犀川の分流である自然流を利用したもので堰口は中世にさかのぼり、伊勢神明社の勧請もこの地が伊勢御厨として設定されたことと関連したものともみべきであろう。犀川から取水する上中堰が布施高田や布施五明一帯を灌漑しており、布施御厨がこの一帯に比定される。

上中堰の灌漑地帯をみると、上堰と中堰の間を蛇行しながら流れていた河道跡が残っている。現在でも50 cmから高いところでは2 mほどの段差がある。寛永年間に描かれた「松代封内図」には、この川が犀川・千曲川と並んではっきりと記載されている。今は見られない犀川の一支流であり、鎌倉期や戦国期の史料では「篠井」と呼ばれたものと考えられる。中堰は、今里地区に入って最初の枝堰である荒井沢堰を分流する。この分流地点に南方富神社・円成寺が建ち、中堰は微高地上によって流下する。その東側に内後館と通称される居館跡が残る。土塁跡や堀跡が残り戦国時代の小田切駿河守の墓石と伝承する中世石塔がある。一方、枝堰の荒井沢堰は西南方の川中島町於下地区に入ると、於下館と称する居館跡と隣接して流れる。内後館を上屋敷、於下館を下屋敷と伝承している。この地点で1995年新幹線工事にともなう発掘調査が実施され、於下遺跡が出土した。発掘調査概報によれば、鎌倉時代の掘立柱建物と堀跡、室町時代の前半の屋敷跡とともに、洪水砂を示す砂層が出土している⁽¹⁴⁾。この地域一帯でも鎌倉時代以来の開発が先行していたことが確認された。

上堰は、篠ノ井岡田で布施五明へむかう中条堰と御幣川堰に分かれる。この中条堰が中条集落の微高地を流れる。建武3年（1336）布施御厨中条郷一分地頭市河孫十郎（市河文書 信史5-353）が知行していた郷村がこの地である。御幣川堰は布施高田地籍の微高地を流れ、内堀地区を灌漑する。ここに「内堀」と「佃」地名が二か所残っている（図1）。現在でも御幣川堰の用水がほぼ方形に屈曲し堀跡があり、東西120 m・南北130 mの居館跡の存在を復元できる。台形の居館跡で鎌倉武士の館跡と考えられる。高田地蔵堂には、阿弥陀・地藏・薬師の弥陀三尊種子の武蔵型板碑が本尊としてまつられている。幅28.5 cm、高さ54 cmで鎌倉後期の様式的特徴をもつ。この布施高田館跡こそ布施氏にはじまる布施氏の屋敷跡の可能性が高い。

篠ノ井築地で御幣川堰は枝堰の岡田堰を分枝する。ここでも1995年の発掘調査で築地遺跡が確認され、平安から鎌倉時代の住居跡が出土している。⁽¹⁵⁾この岡田堰は布施高田を流れて、横田・会地区では西堰と呼ばれて、排水路である大払堰に流下する。篠ノ井会集落が島状の微高地上に位置する。この西堰の用水路がほぼ方形に屈曲し、一部に堀跡と土塁跡で囲まれた居館跡がある。東西230m・南北180mで、本郭部分には「殿屋敷」「宮内」「古町」などの地名が残る。この居館跡を横田城といっている(図1)。集落全体が居館跡のようで、可毛羽神社の東側には用水が半月形にまわり戦国時代の馬出し郭跡も残っている。養和元年(1181)の横田河原合戦で平氏軍がここに陣をおき、応永7年(1400)の大塔合戦では守護小笠原長秀が陣をおいた。川中島合戦でもここが改修されて使用された。⁽¹⁶⁾この一帯では、千曲川の自然堤防によって排水は妨害され、悪水払い＝排水路としての大払堰が大きな役割を果たしている。

こうしてみると、布施御厨は上堰・中堰を中心にした枝堰にそって中世の居館跡が分布し、発掘調査でも平安・鎌倉・室町後期の遺物・遺跡が確認されたことがわかる。

他方、犀川から取水する下堰が灌漑する一帯に富部御厨の遺跡が集中する。下堰は荒沢堰を分岐したあと、篠ノ井北戸部に入って戸部堰と名前を変える。北戸部・上布施の集落の微高地上を掘り進み、常泉寺の東側で宮堰を分岐する。この常泉寺は東側に大木の櫓と土塁跡を残しており中世の居館跡である。

常泉寺横を南流した戸部堰はさらに更級斗女神社の裏で大御堂堰を分岐して小森沢へ進む。大御堂堰は平井地区を流れて篠ノ井東福寺地区に入り千曲川に排水する。この大御堂堰が南宮遺跡一帯を灌漑しており、その地下から平安時代の遺跡とともに自然流路が出土したことは前述した。

戸部堰は流下して篠ノ井杵淵地区へと進む。杵淵郷は鎌倉時代の郷名としてみえ、この中世郷村の灌漑用水は戸部堰の流末になっていた。戸部堰から分岐した宮堰は下布施地区から神明集落を通じて岡神明社の門前で分水している(図1)。この用水路が岡神明社を意識して開削されていたことがわかる。この岡神明社にあった大般若経の一部が今も丸子町法住寺と小諸市釈尊寺に伝来している(信史5-8)。

富部御厨神明社 右筆実秀

「真讀了」

元亨元(大才辛酉)十一月十八日

於信濃国更科郡富部御厨杵淵郷書写畢

同十二月廿五日 一校畢

巻534の奥書には元応2年(1320)年8月9日の銘文がある。当時この岡神明社が富部御厨杵淵郷に属し富部御厨神明社と呼ばれ、社僧実秀が大般若経を書写したことが確認できる。この宮堰が神明社とセットで鎌倉時代には開発されていたことを推測させる。

こうした郷ごとの鎮守はどのような機能をもっていたのか。諏訪社領若狭国御賀尾浦では鎌倉時代に諏訪社が勧請されたが、そこでは毎年諏訪本社に送るための御贄狩が実施され、御贄屋に干魚を納め3,4年に一度本社に運送した。⁽¹⁷⁾伊勢神宮領相模国大庭御厨に勧請された伊介神社には、「供祭料魚」や郷内で刈り取った大豆・小豆が納められており、その破壊とともに「供祭料米、農料出挙并甲乙輩私物」や熊野僧供料なども行方不明となった。⁽¹⁸⁾こうした事例からみても、鎌倉時代の

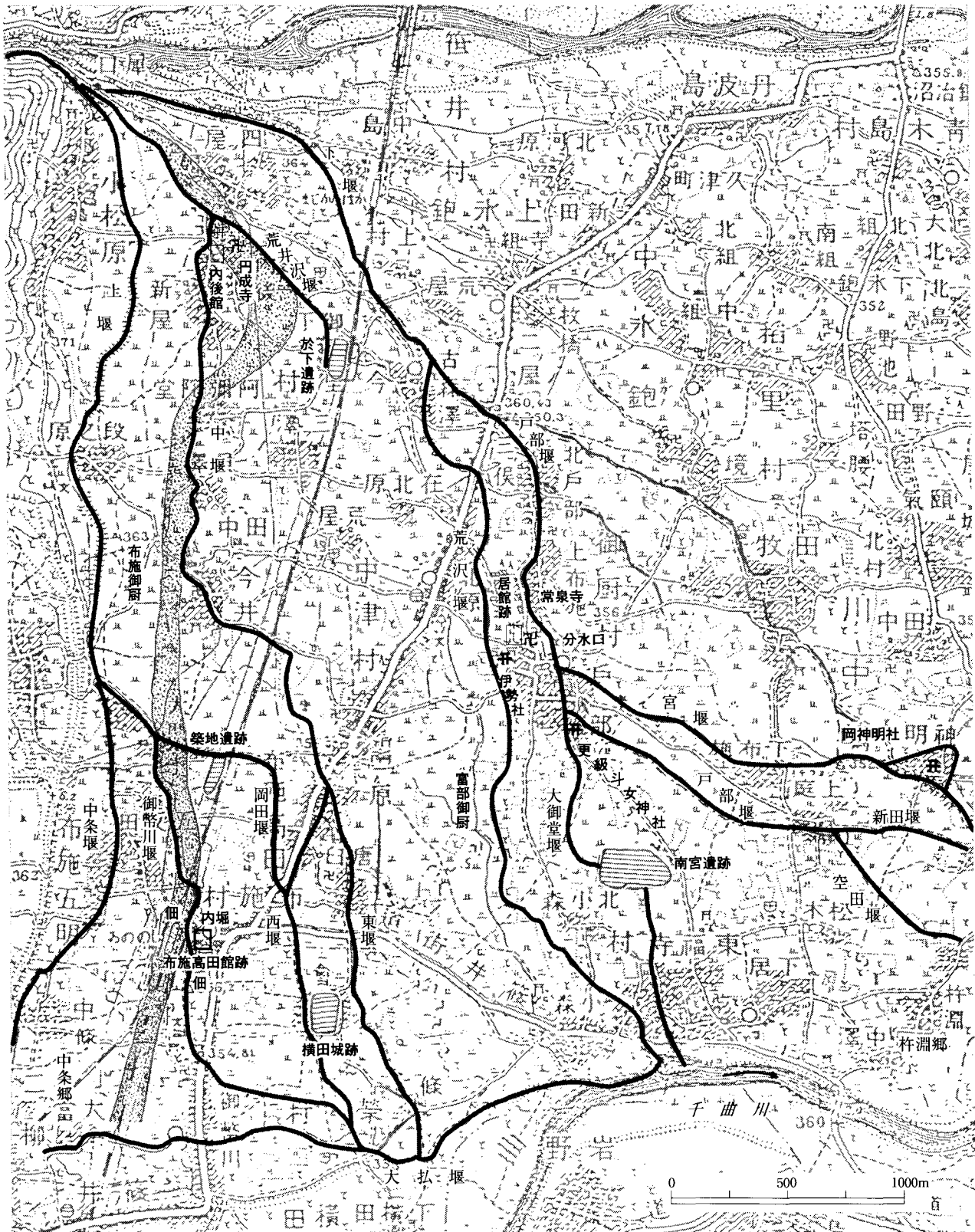


図1 布施御厨・富部御厨の荘園遺構図

御厨に勧請された神明社には、供祭料の魚や年貢米などのほか、農料出挙や伊勢上分料・熊野僧供料など投資用の資金が貯蔵されていたものとみてまちがいない。それらが、この地帯の御厨の開発資本として投資されたものと考えられる。

このように洪水地帯での御厨開発が国衙と御厨との共同投資によったと考えられる事例は遠江国鎌田御厨でも文献史料により確認できる。それによると康和4年(1102)に

「諸国之例に任せ、去応徳年中を以て在国司に訴申すの日、公地御厨相共に損無きにより、便水の堰溝を掘るべきの由、外題あり」

とある。公領と御厨が共同で便水の堰溝を開削する許可を国司が受け、その工事が実施されたが、公地田堵は堀役に加わらず御厨住人が数十町余の堰溝を掘りとおした(光明寺古文書 平1509)。鎌田御厨は、静岡県磐田市の太田川河口付近に比定され、今の浦川などと合流する地帯であるから、中世には砂丘背後の潟湖があった可能性が高い。中世の福田湊がこの河口付近にあった。低湿地での排水路開発を国衙と御厨の資本で共同開発しようとしていたことがわかる。

信濃の御厨地帯で御厨と国衙の訴訟が頻繁であったのも、現地における開発資本として国衙のみならず伊勢御厨の資本が投資されたことが背景にあったものと考えざるを得ない。

布施・富部御厨の開発勢力

では、信濃の二大河川流域に開発された伊勢神宮領布施・富部御厨を設定した開発勢力はどのようなものであったのか。

養和元年(1181)木曾義仲と越後城氏が信濃国横田河原で決戦に及んだことは有名である。『吾妻鏡』は「筑摩河辺」、『源平盛衰記』は「筑摩河の耳、横田河原」、『平家物語』は「筑摩川横田莊」と記している。しかし、なぜ、この地が源平両軍の決戦の場選ばれたのか、この地がなぜ富部御厨の領域内にあったのかその疑問はこれまで解かれていない。

その点で注目されるのは、『源平盛衰記』に描かれた平氏方の「信濃国ノ住人富部三郎家俊」と源氏方の「上野国ノ住人西(佐井)七郎広助(弘資)」との一騎打ちである。富部三郎家俊はつぎのように氏文を読んだ。

「家俊カ祖父下総左衛門大夫正弘ハ鳥羽院ノ北面也、子息左衛門大夫家弘ハ保元ノ乱ニ讃岐院ニ召レテ仙洞ヲ守護シ奉キ、但御方ノ軍破レテ、父正弘ハ陸奥国ヘ流サレ、子息家弘ハ討レ奉リケレトモ、源平ノ兵ノ数ニ嫌レヌ、正弘カ子ニ布施三郎惟俊、其子ニ富部三郎家俊也」(『源平盛衰記』 信史3-78)

この氏文読みは、「兵の家」の家系を誇り先祖の栄誉を数え上げて、社会的な認知を経た武士であることを相手に知らしめる行為であったという。⁽²¹⁾ここには平正弘一子息左衛門大夫家弘という京における父子の系譜と保元の乱に参加した故事とともに、平正弘一布施三郎惟俊一富部三郎家俊という田舎における系譜とが記されている。⁽²²⁾布施御厨と富部御厨が、鳥羽院北面平正弘の子孫である布施三郎惟俊や富部三郎家俊という信濃平氏の名字の地＝根拠地であり、彼等は保元の乱で崇徳天皇方についた平家弘と兄弟であったというのである。『源平盛衰記』はさらに「富部カ郎等ニ杵淵小源太重光ト云者アリ」と記述する。富部氏は杵淵小源太重光を郎等として組織していたというのである。これによれば、横田河原の地にあたる布施御厨・富部御厨は伊勢平氏平正弘の子孫が

在地の郷村を名字とする在地領主を組織・編成し開発した信濃平氏の拠点であったがゆえに、越後城氏がこの地に陣を敷いたことになる。

では、これら合戦記に伝承され中央での史料には登場しない人的関係は、どこまで史実といえるのであろうか。

ここで第一に興味深いのが、杵淵小源太重光が富部三郎家俊の郎等であったという記事と荘園遺構調査で杵淵地区の灌漑用水が富部御厨の中心地を流れる戸部堰に依存しているという事実である。しかも杵淵郷は鎌倉期の写経奥書の郷名として確認される。富部三郎家俊と杵淵小源太重光との主従関係が、用水体系における杵淵郷の戸部堰への依存関係に対応している。中世の荘園や郷村を名字とする侍層の主従関係が用水体系の依存に関係することは、歴史事実としては理解しやすい現象であり、他の事例研究の糸口になろう。いいかえれば、伊勢平氏の資本投資による用水体系の開削が、在地の侍層の小規模開発を組織化し再編成することによって実現されたのであり、それがそのまま伊勢平氏による在地の開発勢力の組織化を意味していたといえよう。

第二に、富部三郎家俊は横田河原で敗死したが、その子孫と思われる富部五郎は建仁2年(1202)尼將軍や北条氏の蹴鞠会に御家人として参加している。⁽²³⁾布施氏についても、『吾妻鏡』建長2年(1250)3月1日条によれば、幕府が閑院内裏を造営した際に「布施左衛門跡」が参加している。富部・布施氏ともに鎌倉御家人として存在していたことはまちがいない。

以上、布施・富部御厨を開発した布施氏や富部氏の存在が確認できることからすれば、布施御厨・富部御厨が信濃平氏の名字の地で重要拠点であったといえよう。越後平氏が木曾義仲との決戦の場に横田河原を選択したのはこの地が平正弘と関係する信濃平氏の拠点であったからといえよう。だとすれば、次の課題はなぜ京都で活躍する平正弘の子孫が在地の開発勢力を現地で組織・編成しえたのか、なぜ平正弘は12世紀に川中島一帯の御厨開発に関係しえたのか、その歴史的背景について検討しなければならない。

②……………伊勢平氏による信濃・越後の所領開発

平正弘・忠貞と保元の乱

平正弘は、保元の乱で左大臣頼長や平忠貞とともにその所領を没収された人物としてよく知られている。その彼がなにゆえ信濃の御厨開発と関係していたのか、その歴史的背景の検討に移ろう。『兵範記』保元2年(1157)3月29日条は、左大臣頼長とともに平忠貞・平正弘などの所領を没官し後白河院領とすべきことを命じた大政官符を載せる。

一、故前左馬助平忠貞領

散在畠地四箇所

壹処禅林寺 壹処山科栗栖 貳処久世郡

伊勢国

鈴鹿川曲兩郡散在田畠(除二所太神宮領五拾町外)

一、散位平正弘領

伊勢国四箇所

大井田御厨 笠間 石川御厨 富津御厨
信濃国四箇所
麻統御厨 公郷領参箇所 高田郷 市村郷 野原郷
越後国壹処
魚野郡殖田郷

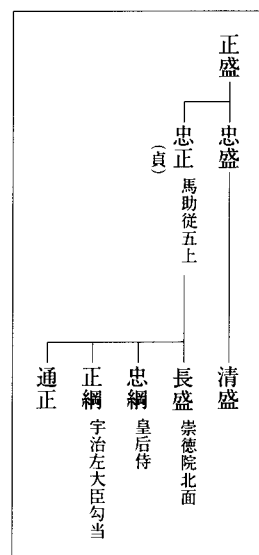
五味文彦はこの史料から、正弘の所領は「平氏一族の所領の一般的存在形態を知る参考となろう」との仮説にもとづいて忠貞（正）の父正盛の所領構成を推測し、「伊勢・伊賀を本拠地とし院に仕えて京の近くに所領をもち、さらに受領を歴任するかたわらで諸国に莊園を形成する」と指摘している⁽²⁴⁾。他方、田中文英はこの史料に注目して、平忠貞領から正盛領の小規模性と散在性を指摘する⁽²⁵⁾。両者の見解は食い違っている。これは、正弘と忠貞（正）の所領形態のいずれが平氏所領の一般的存在形態といえるのかどうか検討されないままであることを示している。以下、両者の所領形態を対比しながら検討しよう。

まず、平正弘と忠貞との所領構成の特質をみれば、第一に平正弘の所領は伊勢・信濃・越後にのび東国志向が見られる。正盛の子忠貞領は伊勢から山城に集中し京都志向であるのと対照的である。第二に正弘領は御厨が五箇所にものほり、公領の郷・村も四箇所である。これらの公領は没官されて後院領となつてからは、市村荘・高田荘・野原荘・於田荘（『吾妻鏡』文治3年3月12日条）としてみえ、大規模な莊園所領となる。ここに、公領の院領莊園化の典型例がみられる。これに対して忠貞領の特徴は、伊勢国鈴鹿・川曲両郡の散在田畠、山城禅林寺・山科の栗林と久世郡の散在畠地である。寺を除けば林や公領下の散在田畠の集合体で所領規模が小規模であり、御厨や公領・莊園はひとつもない。

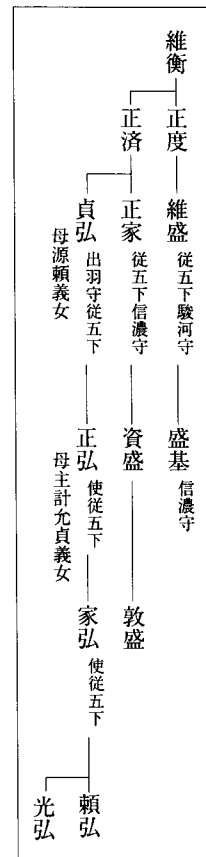
このような両者の所領構成上の顕著な違いは、正弘と忠貞の家系・階層による身分差から生じた経済基盤の違いであったと考えられる。

まず平忠貞の身分的経歴をみよう。保元元年(1156)7月10日崇徳上皇が白川殿に軍兵を集め左大臣頼長が宇治から参入したとき、平忠貞は散位源頼憲とともに軍兵を發して参陣した。そのとき彼は「前馬助平忠正」と名乗っていた（『兵範記』）。武官を辞し左大臣藤原頼長の家侍であり、保元の乱では頼長方の軍事力の中核を担った。7月27日の罪名宣下では「前馬助平忠貞」として謀反人とされ、翌28日に長盛・忠綱・正綱・道行[忠貞郎等]とともに六波羅辺で清盛によって斬られた（『兵範記』）。『尊卑分脉』は、資料1の通りである。

忠貞(正)は、正盛の子、忠盛の弟で清盛の伯父にあたる人物である。官職はわずかに馬助にすぎず従五上にのぼったとあるが、位階は六位クラスにすぎない。その彼が関白忠実の家人で、頼長の家侍になっていた。彼の長男長盛は崇徳院北面、次男忠綱は皇后侍というから頼長の女藤原多子の侍、三男正綱も左大臣頼長の勾当であった。父子いずれも頼長の家政職員であり崇徳院方に属した侍身分であった。高橋昌明⁽²⁶⁾はこの忠正・道行らをなぜか処刑者群から除いている。しかし、最



資料2



近、元木泰雄はこの平忠正が忠実の家人で宇治に宿所をもち、仁平3年(1153)頼長の娘が危篤に陥ったとき忠正の宿所に移される途中に死去したことを指摘している。⁽²⁷⁾六波羅で清盛に処刑された人名と『尊卑分脉』での彼の子息との名前が一致することから、平忠貞(正)一族は正盛の子とはいえ、早くから摂関家の頼長や崇徳院の家政職員としてつかえ六位クラス・侍身分にとどまっていたといえる。活動の舞台は京都とその近国にならざるをえなかった。所領は小規模な散在田畠の集合体であった。

他方、平正弘については、保元の乱での関係者の処刑が終わった保元元年8月3日に彼は陸奥に流罪と決まり、上総に流された散位俊通、下野に流された皇后宮権大進憲親とともに領送使国忠によって処刑地に送られた(『兵範記』保元元年8月3日条)。もともと、彼は7月27日の罪名宣下の名簿には含まれていないし、保元の乱における行動は不明である。その正弘がなにゆえ所領没収、流罪の罪をえたのか。

『尊卑分脉』は資料2の通りである。

まず、彼の子息家弘と保元の乱との関係を見るため、『兵範記』を整理しよう。

軍兵招集 散位家弘、大炊助同康弘、右衛門尉同盛弘、兵衛尉同時弘、判官代同時盛、藏人同長盛、源為国。(7/10条)

罪名宣下 右衛門大夫平家弘、大炊助平康弘、右衛門尉盛弘、兵衛尉同時弘、平光弘。(7/27条)

処刑 家弘、康弘、盛弘、時弘、光弘、頼弘、安弘。(7/30条)

家弘は、崇徳上皇が保元元年(1156)7月10日に軍兵を集めたとき、最初に祇候した人物としてみえ、家弘の子息としてみえる頼弘と光弘は源義康によって大江山で斬罪となった7人の内にみえる。大炊助平康弘も「家弘の男」として新院=崇徳の挙によって式部省の省試に入っている(『兵範記』仁平4年6月24日条)。大江山で斬罪となった家弘以下7人はいずれも「弘」を通字としており、康弘、光弘、頼弘の3人は彼の子息と確認されるから、他の盛弘、時弘、安弘の3人も彼の子息か一門であったとみてまちがいなからう。⁽²⁸⁾正弘の子家弘と孫康弘以下一門の7人が崇徳上皇の軍事力として保元の乱で戦い全員処刑された。正弘自身は高齢であり直接関与しなかったので、子孫らの罪に縁座し所領没収・流罪となったと考えられる。したがって、没官された所領も正弘領のすべてであったとは考えられない。

この一門の階層は、正弘が「散位」、子息家弘も「右衛門大夫」になっている。彼の父貞弘は出羽守、伯父正家は信濃守であるから受領クラスの家柄に生まれたといえる。『今昔物語集』巻13によると、左衛門大夫平正家は信濃国内に所領をもち京都と信濃を往来していた。雑色人として信濃の人を召し使っていたが、京都から下向した正家の郎等はその雑色を憎んでいた。屋敷に馬盗人が入ったとき、郎等は雑色が馬盗人と協力して犯行に及んだと讒言したため、雑色が緊縛された。しかし、日頃法華経を詠んでいたのですの難を逃れたという説話をのせている。正家が信濃守であったのは史実であるから、彼が信濃に所領をもって都鄙間を往来していたというのもまちがいあるまい。

正家の従兄弟の子息盛基が元永元年（1118）にやはり信濃守になっており、五条烏丸の邸宅が放火で焼失している（『中右記』元永元年閏9月9日条）。信濃との関係が深い一門であったことがうかがえる。

こうしてみると、平正弘の場合は父貞弘や伯父正家が受領になり、自分の子息も右衛門大夫になっているから、五位クラスの諸大夫であったことがわかる。正弘が信濃に4箇所もの所領をもち、しかも野原郷・市村郷・高田郷の3箇所がいずれも公領であるのは、一門の信濃守就任にもとづくものであり、国司による公領の所領化の典型例といえよう。信濃守として国衙権力を利用して自己の所領形成をはかっていたのである。忠正（貞）の所領編成が散在の小規模所領群であるのと比較して、公領や御厨を所領としていた大きな格差は、正弘一門が諸大夫であったことに起因するものといえよう。

伊勢平氏の信濃への進出

では、平正弘の所領形成と伊勢平氏とはどのような関係にあったのか、鳥羽院政期、正盛・忠盛期の動向を中心に検討しよう。

正弘は、右衛門尉のとき院での闘乱が原因で左衛門尉平清賢とともに停任されたが、天永2年（1111）11月19日に還任を認められた（『中右記』）。白河院の葬送が行われた大治4年（1129）7月15日の定では七日御法事雑事で「掃除行事」として平正弘、平清賢の名がみえ、7月26日新院方の定では五七日御法事雑事事の「施米行事」となっている（『中右記』大治4年7月15・26日条）。平正弘は平清賢とともに鳥羽院の北面であった。久安3年（1147）6月忠盛・清盛父子と比叡山衆徒・日吉祇園両社神人との闘乱事件では、散位平正弘が河内守源季範とともに「各軍兵を率いて発向す、法皇仰による也」（『本朝世紀』久安3年6月28日条）とある。この時期鳥羽法皇は頻繁に「武士御覧」を繰返しているが、7月21日には「散位平正弘、子姪之輩13人を率いる、皆甲冑を着す」とある。このとき源重成の郎従甲冑之士は、父重時の先例により流矢を防御するため数幅之布を纏い「一族之風」と見る者の眼を驚かせた。世俗はこれを「保呂と号した」とある（『本朝世紀』久安3年7月21日条）。鳥羽院による頻繁な「武士御覧」が、武家風俗の形成と定着に寄与したことがわかる。正弘も鳥羽院によって編成された「源平之輩」の一人であった。⁽²⁹⁾ 軍兵といい、子姪之輩13人を率いたというから地方から一族郎従を動員していたことがわかる。

では、彼の本貫地はどこであろうか。その点で注目されるのは、伊勢国における4箇所の所領群である。大井田御厨、笠間、石川御厨の三つはいずれも伊勢国員弁郡内に分布する。稲本紀昭によると伊勢神宮の神郡に成立した御厨については、建久3年伊勢大神宮神領注文（神宮雑書 鎌⁽³⁰⁾614）には記載されていないという。員弁郡が神郡であったから、この三つの御厨についての情報が欠けている。しかし、この注文には桑名郡富津御厨について

「件御厨 為往古之神領、備進供祭上分之处、本領主平正礼謀反之科、保元元年被没収之後、
任 宣旨立券了」

と明記される。平正弘は富津御厨の「本領主」であった。信濃国芳美御厨の「本領主源家輔」の記載（『中右記』）と同様である。本領主とは売券などに「相伝私領」の保有者として登場するもので、所当・年貢は賦課されても、未進の代償として質権を設定したり売買立券や寄進する権利を公認さ

れていた。平正弘が伊勢国富津御厨の本領主であったことからすれば、この地の開発を請負って国衙から相伝私領として伝領する権利を公認された開発領主であったと考えられる。伊勢神宮の神郡＝員弁郡内の三つの御厨開発にも彼が大きな役割を果たしていたものと推測される。正弘自身が伊勢を本貫地とする伊勢平氏であった。

では、その伊勢平氏がいつごろからどのように安曇郡から善光寺平一帯の御厨地帯に進出するようになったのであろうか。この点で興味深いのは、著名な吉田れん旧蔵文書の鳥羽院庁下文である(信史 3-641)。

院庁下 信濃國小川御莊公文等

可停止平維綱妨任預増証下知令致沙汰下司職事

右預大法師増証解状、当御莊者為相伝領致無相論、仍以券文寄進最勝寺御領之間、下司清原家兼、依致無道沙汰池田宗里為舊敵去五月十五日被殺害畢、其後平維綱号有家兼讓状并文書致濫吹押取遺物、擬執行莊務尤無其謂者、早停止彼維綱之妨、任増証下知可令致下司沙汰之状、所仰如件 公文等宜承知不可違失故下

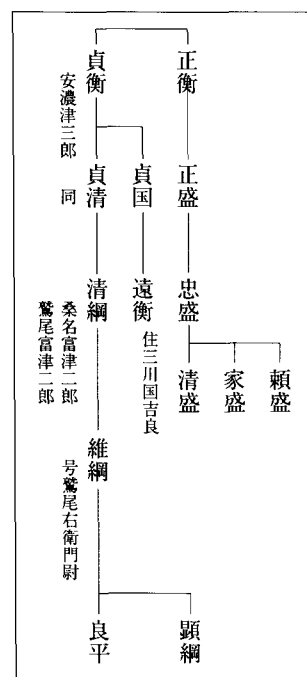
天養二年七月九日 主典代主計権助兼因幡権介皇后宮大属大江朝臣(花押)

(以下署判略)

これによると、水内郡小川莊は僧増証の相伝領であった。その下司清原家兼が旧敵池田宗里との私戦で殺害されたのを契機にして、平維綱が家兼讓状や証拠文書を根拠にして家兼の遺物を横領し莊務をも執行しようとした。預所の増証は最勝寺の本所鳥羽院庁に提訴して、ようやく天養2年(1145) 維綱の妨停止を命じる下文を獲得した。この史料はかつて五味文彦も注目し、『本朝世紀』久安5年(1149) 3月15日条と併せて、平維綱が忠盛の子家盛の乳母夫であり、平氏の家人であったことをあきらかにした。⁽³¹⁾鎌倉初期には乳母とは関係なく乳母夫が決められ、養君の雑事と後見としての役割を果たしたことが指摘されている。⁽³²⁾したがって、維綱の場合にも、彼の妻が忠盛・池禅尼夫婦に生まれた家盛の乳母として仕えたという解釈に限定する必要はない。忠盛が嫡子ではない家盛の乳母夫として維綱を任命したものとも考えられる。

この平維綱が信濃での清原家兼と池田宗里との紛争に介入した。池田氏の苗字の地は「安曇郡矢原莊池田郷内堀内」(『親元日記』寛正6年5月19日条)として中世史料に登場する。この地は平安時代に「野原郷」という公領であり、すでにみたように正弘領として登場するのである。平維綱の池田氏への軍事的介入と正弘領野原郷の形成とは密接に連動している可能性が高い。しかも、この地は伊勢神宮領矢原御厨となり、鎌倉期を通じて蓮華王院領野原莊と年貢配分をめぐる訴訟を繰り返していたことが、石井進によってあきらかにされている。⁽³³⁾平維綱について、『尊卑分脉』(資料3)をみよう。

伊勢平氏の貞衡・貞清が二代にわたって安濃津三郎を称し、清綱は桑名富津二郎・鷲尾富津二郎を称している。安濃津・桑名は



資料 3

平安時代からの津として著名であり、富津は伊勢国富津御厨を指す。この御厨は桑名郡にあり、のちに正弘領になったことはすでにみた。平維綱の父清綱が富津二郎を名乗った苗字の地富津御厨はここでも正弘領として継承された。平清綱・維綱父子と正弘との密接な関係を窺わせている。維綱は、父と同じく鷲尾を号し右衛門尉に昇った。この点について、『分脉』は「後白河院御代西国海賊蜂起之時、令静謐、直任右衛門尉」と注記している。しかし、その時代は後白河院御代ではなく鳥羽院政期の備前守忠盛による海賊平定事業とすべきである。『長秋記』保延元年8月21日条に「右兵衛佐清盛叙従四位下兼兵衛佐、鷲尾馬允惟綱任右衛門尉、忠盛朝臣罰海賊賞也」とある。保延元年（1135）にすでに維綱は鷲尾を号し馬允から右衛門尉に任官していた。しかも、その立身は忠盛の海賊平定の賞として清盛任官とともに行われたのである。最近、牛山佳幸はこの鷲尾を地名から尾張国富田庄鷲尾郷（愛知県平和町）に比定し、維綱が伊勢平氏の威勢を背景にして鳥羽院との関係を利用して実質的な院領荘園の下司職を奪おうとしたと推測している。平忠盛・清盛と関係の深い藤原家成・隆季の子孫善勝長家の一門隆良流が鷲尾を号している『尊卑分脉』⁽³⁴⁾から、東山鷲尾との関係も注目される。一門の遠衡が三河国吉良庄に居住したというから、伊勢から尾張・三河へと進出していた可能性が高い。

いずれにせよ、伊勢平氏で港湾の武士団であった平維綱は、鳥羽院近臣として台頭する忠盛の家人として、信濃の在地における荘官や在地武士層の紛争に介入しながら、在地所職の権益を確保しようとしていたことがわかる。しかも、維綱の父は伊勢富津御厨にも関与しておりその地が正弘領となったし、彼が介入しようとした矢原御厨池田郷も平正弘領となった所領と一致している。

この安曇郡から小川庄にかけては、高瀬川上流に矢原御厨、仁科御厨、更級郡麻績御厨がつづき、伊勢神宮領になった地域と一致する。しかも野原郷・麻績御厨がいずれも平正弘領となり、仁科御厨には後述するごとく信濃平氏の仁科氏が鎌倉時代に入っても存続し、千国庄地頭も信濃平氏であった。北信濃の御厨開発に伊勢神宮と伊勢平氏が積極的な役割を果たしたことはあきらかであり、平忠盛の家人維綱の進出を先駆としながら、それを継承・利用・発展させたのが平正弘であったことがわかる。

平正弘は、信濃国水内郡においても市村郷・高田郷という公領を所領としていた。両郷はともに善光寺平の裾花川・浅川扇状地上に位置し、善光寺門前におかれた後庁＝在庁官人の直下に位置した国衙領で、災害被害のもっとも少ない地帯であった。市村郷の用水体系は、後庁郷内に取水口をもった鐘鑄川堰から分岐した宮堰の流末に依存している。高田郷の用水堰は中世裾花川の流路である八幡川堰に依存している。国衙機構である後庁の影響力のつよい郷村を所領としていた。これらは、⁽³⁵⁾没収されて後院領市村高田郷となっているが、散在した公領を荘園化したものであった。

正弘領は越後国にも波及し、魚野郡殖田村を所領とし、没官されて後院領となってから、文治2年乃貢未済注文には「院御領預所備中前司信忠於田庄」とみえる。備中前司信忠は、後白河上皇の院近習大江信忠に当たり、備中守から下野国知行国主に転じ菌部保立券の国司庁宣に袖判をすえている（東南院文書 平3194）。この大江一門は、官務の管轄下におかれた採銅所の預を世襲する家柄であったことが指摘されている。⁽³⁶⁾この荘の地頭については不明であるが、同じ魚沼郡浦佐保には平繁基下文写が残る。⁽³⁷⁾

下浦佐村天王堂

僧道乗房弁覚

四至（東限寺田際 西限高山頂 南限形太沢 北限黒沢）

右以人為令寺務執行所補任也、件四至之内、限永代可禁断殺生也、仍住民等宜永知、敢勿違失、故下

承久三年十月三日

（花押）

地頭平繁基

『越佐史料』や『新潟県史資料編』では「下 浦佐村天王堂 平繁基」と書きはじめているが、写真本では上記のごとくである。花押は同所蔵文書の延徳3年6月16日前肥前守顕景安堵状や明応5年正月20日肥前守顕景安堵状の「顕吉（花押）」の花押とまったく一致する。鎌倉期の写とはいえず、室町戦国期の写であることがわかる。しかし、問題はこの写の作成がなんらかの根拠にもとづいて作成されたのではないかという点である。「下 浦佐村天王堂」と書きはじめ、奥下に「地頭平繁基（花押）」と署判する文書形式なら、地頭下文としては当時の類例と合致する⁽³⁸⁾。平繁基が承久年間に存在しており、この一帯に平氏勢力が存続していた可能性が残る。この越後における平繁基は、八条院領信濃国東条莊領主職の平繁雅と「繁」を通字としており、その一門は後述のごとく越後平氏といわれるほど、越後・信濃に分布していた。両者の関連を推測させるに十分である。だが、この古文書は史料学上はあまりに問題が多く、今後の検討課題として指摘するにとどめたい。いずれにせよ、伊勢平氏の平正弘が院政期に信濃から越後にかけて伊勢神宮領の御厨分布地帯に沿って勢力を浸透させていたことがわかる。

③……………善光寺周辺の土砂災害と用水路の再開発

善光寺周辺の公領・荘園と用水体系

西部山地の山麓線に発達した裾花川・浅川扇状地には、中世善光寺門前の後庁をはじめとする主要な国衙領と荘園が分布する。それらの荘園遺構調査報告については、別に述べた⁽³⁹⁾。ここでは、図2「善光寺平北部の用水系と荘郷図」を参考にして、必要な範囲で災害との関係を中心に整理しておきたい。

善光寺周辺の用水システムを整理すると、第一の用水幹線は鐘鑄川堰である。裾花川から取水し、妻科神社の前を通り河岸段丘崖の等高線上を東に向かい、善光寺の門前の南大門地籍をこえ、横山の山麓線を囲むように段丘崖を北東し、湯福川・堀切沢と合流して条里遺構の等高線上を東流して石渡地籍の槻井泉神社前で六ヶ郷用水と合流する。この堰は妻科・鶴賀・三輪・荒屋・平林・北条・桐原・中越・吉田・太田・稲田の11箇村で用水組合を組織している。その灌漑地帯に位置する中世の荘郷は、善光寺門前の後庁郷と今溝莊北条・東条莊内小井・吉田や公領と推測される平林・宇木・桐原に相当する⁽⁴⁰⁾。取水口は在庁官人の拠点である後庁郷にあり、その流路は善光寺を取り囲むように寺域の境を流れている。善光寺の「寺辺」を象徴するのがこの鐘鑄川であったことは、鎌倉時代の清浄光寺本『一遍上人絵伝』に描かれていることから明らかである。その主要な灌漑地帯が、後庁郷を中心にその周辺に位置する松尾社領今溝莊や八条院領東条莊内の散在郷村であり、この用水路の再開発が国衙権力と院領荘園との共同作業によって実施され、両者の開発資本投資に

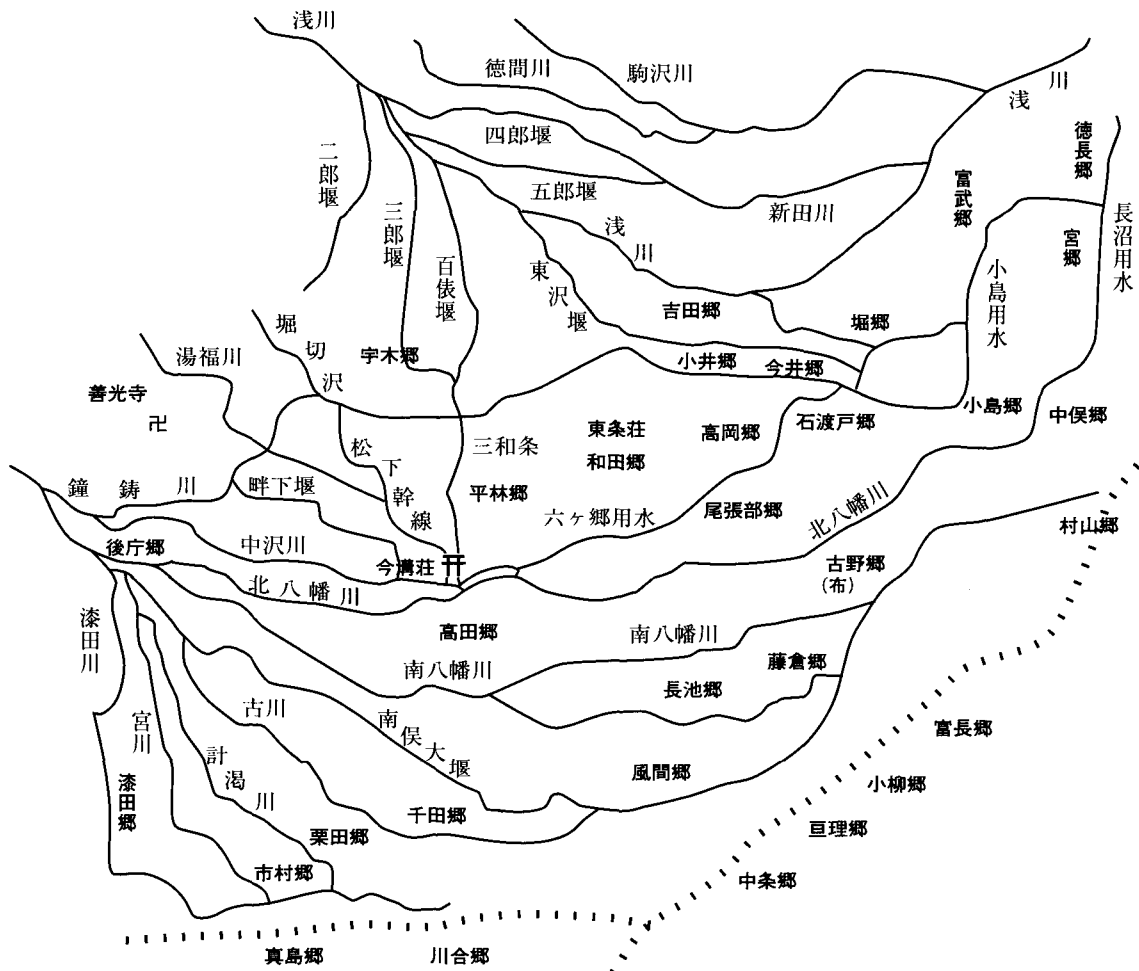


図2 善光寺平北部の用水系と荘郷図

よって用水路の管理・維持がなされたものと推測させる。

この鐘鑄川堰から最初に分岐する用水堰が中沢川である。妻科神社前で取水した川幅 50 cm ほどの小用水路である。その後、後庁付近や善光寺門前の悪水払をあつめ、北条付近では掘り底の深い 2 m ほどの用水路になって中沢川と呼ばれる。湯福川や畔下堰の落ち水を集めた払堰が北条地籍で集まり小中沢とよばれ、中沢川に合流したあと守田廻神社裏で北八幡川に合する。中沢川が後庁郷や鐘鑄川の悪水払いの用水を集め再利用する用水体系であったことがわかる。その灌漑地帯はいずれも鶴賀・北条地籍などで鐘鑄川堰の水掛りの不足する一帯に相当し、いわば用水不足地帯に悪水払いの用水を再利用して補完する機能をもっていたことがわかる。この北条は中世に「今溝荘内北条」(弥彦神社文書 信史 5-109)と呼ばれており、永万年間(1165・66)に京都松尾社社務職の秦相頼が今溝荘園を立券したことが知られている。⁽⁴¹⁾栗岩英治は今溝荘の地名となった今溝を現在の鐘鑄川に比定するが、⁽⁴²⁾灌漑体系からすれば今溝こそ中沢川にあてべきで、12 世紀後半に松尾社の開発資本によって開発され、その灌漑地帯に今溝荘が立券されたものといえる。言い換えれば、鐘鑄川堰は平安時代以前から存在しており、後庁郷や三輪、など用水路周辺の公領にはよく灌

溉されていた。しかし、鶴賀や北条など公領の末端や周辺一帯では鐘鑄川の灌漑用水が不足していた。特にこの地域は、後述するごとく湯福川や堀切沢による土砂災害の被災地帯末端にあたっていた。国衙権力の衰退とともに用水不足や災害復興が困難になったことは想像に難くない。そのため、永万年間に鐘鑄川堰の悪水払いの用水を再利用するために中沢川を新設し、松尾社によって今溝荘という新しい荘園が立券されたのである。こう考えれば、松尾社領今溝荘が、鐘鑄川堰の周辺部、灌漑用水の不足する一帯に立券されたことがわかる。

第二の用水幹線は八幡川堰である。現在は鐘鑄川取水口より下流で裾花川から取水し、善光寺門前の南方「高畑」地籍を通り、北八幡川と南八幡川に二分して東流する。北八幡川の主要な灌漑地帯が中世の高田郷、南八幡川が長池郷である。この八幡川からは、後序郷の南方にある取水口から漆田川・宮川・古川が分岐し、それぞれの灌漑地帯が中世郷村の漆田・市村・栗田郷に比定される(図2)。漆田郷は中世に守護館が置かれ旧国衙領であり、市村郷や高田郷はともに保元3年(1158)まで公領として平正弘の所領であり、その後、没収されて後院領市村高田荘になった。こうしてみると、この八幡川から取水する用水路は、平安時代にはいずれも国衙領の灌漑用水として利用されていたことがわかる。それらの取水口が現長野県庁の前方にあり、中世後序郷の南側に位置している。この用水路が国衙・後序の支配を受け国衙領の経営と結び付いて早くから開発されていたことを想定させる。この八幡川は中世の裾花川と一致し、『大塔物語』に「善光寺の南大門および裾花川の高畠」とみえ、清浄光寺本『一遍上人絵伝』にも欄干を備えた大橋と木戸と柵が描かれている⁽⁴³⁾。したがって、古代中世では八幡川は裾花川の本流で自然流であり、用水路として早くから利用されていたことがわかる。

中世の土砂災害と鐘鑄川堰の再開発

この一帯の用水体系の歴史については、鐘鑄川堰と八幡川堰の開削時期をどのように理解するかが大きな研究課題である。早くは岩崎長思をはじめ、栗岩英治、霜田巖などの研究が蓄積されている⁽⁴⁴⁾。最近では、福島正樹が鐘鑄川の開削時期を条里的地割の施工と同時期で「およそ平安時代はじめ」とし、「善光寺の伽藍配置と条里(道)のプランが一致する」ことを指摘している⁽⁴⁵⁾。ここでは、この説に準拠しながら、中世の再開発事業を中心に考察したい。

旧市街地の国衙領が八幡川流域の灌漑地帯に分布するのに対して、鐘鑄川堰周辺には公領後序郷・三輪・平林・宇木・桐原のほかに院政期になって今溝荘や東条荘など権門領が分布する。このような二つの用水路の対照的な違いはなぜ起きたのか、という疑問である。

善光寺周辺の灌漑図を作成したものが図3である。この中で注目すべき資料は、平成6年長野・豊野線道路工事や平成9年市道2号線発掘調査によって、善光寺門前から町屋跡・宋銭・地下倉跡・埋葬骨などが出土し、中世の湯福川による土砂災害がきわめて頻繁におきていたことが判明したことである。発掘調査地点は中世の善光寺門前に相当していることが図3からも伺われる。発掘調査の本報告は刊行されていないが、概報要旨によれば、土層堆積状態は⁽⁴⁶⁾

- | | |
|--------------------|----------|
| ・現代～近代の攪乱・整地層 | 地表～50 cm |
| ・近代の整地層(黄褐色土層) | 50～60 cm |
| ・近世の火災痕跡(炭化物焦土混合層) | 60～80 cm |

-
- | | |
|--------------------|------------|
| ・近世の整地層（灰褐色土層） | 80～120 cm |
| ・中世の火災痕跡（炭化物焦土混合層） | 120～180 cm |
| ・中世以前の遺物包含層（黒褐色土層） | 180 cm～ |

と判明した。この近世の整地層からは、370点をこえる大量の中世石塔が出土し、ほとんどが五輪塔の地輪部分や基礎石であり、その中には「応永卅一年八月二十六日高阿弥陀仏」「明応八年八月十三日□阿」などの銘文のあるものも発見されている。金泥で銘文が書かれているものもあり、中世後期の供養塔が近世善光寺門前町の基礎工事に石材として大量に再利用されていたことが判明した。⁽⁴⁷⁾

これまで善光寺の中世遺構は近世善光寺の遺構によって破壊されたものと推定され、善光寺周辺は遺跡包含地として登録されていなかった。今回の発掘調査では、中世の遺物包含層は地下120 cm以下であり、この一帯が湯福川の大量の土砂災害によって埋没していることがはじめて判明した。特にこの中世以前の遺物包含層では、砂礫の混合が顕著であり、古代中世における湯福川の土砂災害が頻繁に善光寺周辺を襲っていたことを証明した。古代・中世の善光寺の実態は今後の発掘調査によって解明される可能性が確実にになった。

現在の湯福川は善光寺の北方裏側を迂回して条里水田を斜めに横断しているが、中世には分流して寺の敷地内を横切って、現在の畔下堰や畔下堰分水にも流下していたものとみてまちがいない（図3）。この湯福川の押出しは近世・近代でも繰り返され、現在でも湯福川は鐘鑄川の上を交差する樋掛りになっており、その主流路は条里的区画を斜めに横切って松林幹線（堀切沢）と合流している。江戸時代、湯福川の土砂で鐘鑄川が埋まり訴訟が繰り返されていたことは霜田の論考にもみえる。地形学的にも、湯福神社を頂点とする1000分の50という急な傾斜をもち湯福川扇状地が複合して張り出していることが指摘され、古代中世からの押出し・土砂災害が善光寺や鐘鑄川堰を襲い、三輪地区から平林・北条地籍に及んでいた。同様の現象は善光寺北側の堀切沢でも見られる。善光寺裏の箱清水地籍には陥没した小地溝帯の低湿地があり、ここから発する沢が堀切沢である。善光寺北の城山断層が隆起して台地化した急崖を下るため、枯れ沢ではあるが土砂災害をもたらした。この堀切沢と鐘鑄川との合流の仕方には特徴があり、すぐに合流せずに並行して流れたあと一部は松林幹線となり南流し、一部は鐘鑄川堰となって東流する（図3）。福島正樹は前掲論考でこの点に注目し、堀切沢が合流点以東の現鐘鑄堰の本流であったものと推測している。⁽⁴⁸⁾

堀切沢の押出しは急流であるからその流路は何度も改修され、その本流である松林幹線は条里的地割を斜めに横断しながら、部分的に条里区画に沿うようにジクザグな流路となったのち、平林地籍で条里区画にそって一直線に南流して守田廼神社で北八幡川に合流する。また浅川の支流が宇木沢にあつまって鐘鑄川堰を越え、三輪幹線として守田廼神社で北八幡川に合流する。つまり、三輪・平林・荒屋地籍はこれら土砂災害の被災地域であり、これら三輪地区にも存在した条里的地割は、湯福川と堀切沢・宇木沢からの押出し・土砂災害から条里区画水田を守った闘いの歴史を物語っており、鐘鑄川堰の歴史はこの土砂災害による用水路埋没を復旧する再開発の歴史であったといえる。この地区は鎌倉時代に「三和条」「宇木・小居・平林」（守矢文書）とみえるが、八条院領東条荘に入っていたとの確証がみえない。『長野県史通史編2 中世1』では東条荘としたが、小居郷＝越郷が公領と想定されることからすれば、国衙領であった可能性が高い。その隣郷の東・西和田地籍は

「東条莊内和田郷」(守矢文書)と明示されている。

こうしてみると、後庁郷で取水した鐘鑄川堰は善光寺門前から寺辺の境を流れ、東条莊和田郷の条里水田を灌漑するまでの間に、湯福川と堀切沢という二つの沢からの土砂災害に絶えずさらされ、その維持・管理には巨額な資本が必要とされたことがわかる。

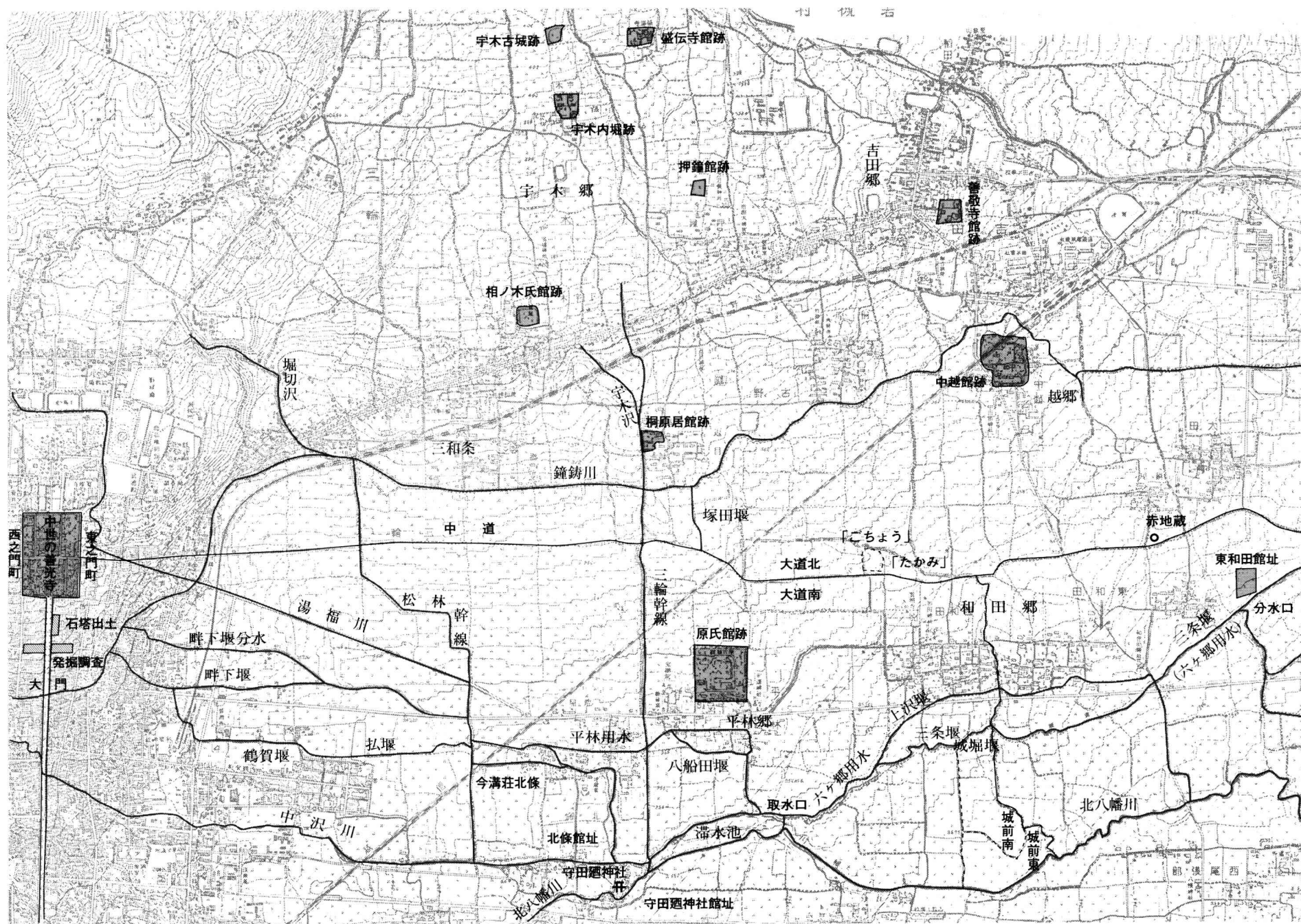
以上の諸点から推測すれば、古代には鐘鑄川が開削され、律令政府が衰退したあとも後庁郷にあった国衙権力がこの用水路の維持管理にあたった。しかし、平安期の自然災害が多発し湯福川と堀切沢という二つの沢からの土砂災害によって鐘鑄川が埋没したとき、三輪地区の条里水田の再開発に努めることが後庁の国衙権力の限界であり、その周辺部の北条地帯や和田郷以東の再開発を独力でこなう力は国衙権力ではなく、荒廃・放置されたものと想定される。このため、まず永万年間に松尾社の開発資本を導入し鐘鑄川から取水する中沢川を改修して悪水払いの用水を再利用する今溝が開発され、鶴賀・北条地籍が松尾社領今溝荘として再開発・立荘された。これに続いて、八条院につらなる院女房や近臣が国衙と共同で鐘鑄川の再開発・延長に乗り出し、和田郷以東の復興した灌漑地帯の郷村を八条院領東条荘として立荘したものと推測される。文治3年頼朝は善光寺を再建するため、目代に信濃国内の荘園公領を問わず人夫を徴発し、勧進上人に協力するよう命じた(『吾妻鏡』文治3年7月27日・28日条)。この時も当然、門前から寺辺の境を流れる鐘鑄川堰の改修もおこなわれたものと推測される。

こうした土砂災害による用水路の埋没は、鎌倉時代以後も続き、中沢川でも同様であったと考えられる。今溝に関しては長享2年(1488)の諏訪御符札之古書(信史9-444)に「今溝河成候」とある。室町時代、15世紀の土砂災害についての伝承は同じ地形条件をもった太田荘神代郷聖林寺(豊野町)にも残り、中世石塔が出土している。⁽⁴⁹⁾今溝=中沢川が川成になったというのは、湯福川・堀切沢の土砂災害も同時発生したものと推測される。

こうしてみると、鐘鑄川堰の灌漑システムは三輪幹線までの西ブロックとそこから東側の和田・高岡の東ブロックに二大区分されることがわかる(図5参照)。西ブロックでは、湯福川と堀切沢からの土砂災害からいかに用水路と条里水田地帯を守り、再開発をおこなうかが主要な課題であったといえる。三輪地区は戦後までもっとも条里的地割が残存した水田地帯であり、発掘調査でも鎌倉期の遺物が出土している。⁽⁵⁰⁾ここまでが国衙権力の再開発が及んだ地域と想定され、和田郷から以東があきらかに八条院領東条荘に入っており、院権力の開発資本による再開発地帯であったといえよう。鐘鑄川流域の開発景観もこうした複合構造をもっていたといえる。

平林郷と善光寺奉行人

鐘鑄川堰の灌漑地帯の中で、宇木沢の三輪幹線をすぎると、平林・中越地帯がもっとも安定した灌漑地域といえる。条里区画水田がはっきりする大正4年長野市図をもとにこの周辺の灌漑用水・館跡・郷名を記載したのが図4「善光寺平東部の地割・用水図」である。平林地籍では、宇木沢が鐘鑄川堰を越えて南北に流れ、灌漑用水となるとともに、鐘鑄川の分水である塚田堰が平林北部一帯の主要灌漑用水路である。平林居館跡までは灌漑用水が豊かであるが、その南部一帯は水不足になるため、荒屋堰・聖徳堰などの排水と、堀切沢の水を集水して再利用するため平林用水・八船田堰という横堰をつくって補充している。中越地籍も鐘鑄川周辺の条里水田地帯であり、灌漑条件は



よい。鎌倉時代には「小井郷」(守矢文書)「こい郷」(齊藤文書)として史料上確認され、ここも東条荘であった確証はない。

この平林・中越地籍の条里的区割の中に、一直線にのびる「中道」という善光寺への参道と伝承された細道が戦後まで存在していた。古代善光寺の位置は善光寺平の条里プラン上に立地していることが、福島正樹によって指摘され、中世の善光寺参道は二つあったものと考えられる。一つは南北軸で、真島郷・川合郷で犀川を渡り一直線に善光寺に向かう。もう一つは東西軸の参道で、千曲川を布野渡か村山渡で渡川して、長池・高田郷から和田・平林へ三輪地籍の条里地割の上を一直線に「中道」と称する古道をすすみ東ノ門に至る。この古道は、保科宿に出て中世の鎌倉街道といわれた大笹街道に通じていた。文治2年には真島・川合・古(布)野・村山郷の四つが善光寺領となっており、千曲川の渡しがいずれも善光寺領であった。いわば、この中道こそ、上野国から信濃保科宿に出て、渡しを越えて西に向かって善光寺に至る東方からの善光寺参詣路であった。

このうち平林には条里地割の上に完全にのった方形の平林居館跡が残り、平林城跡と呼ばれていた。⁽⁵²⁾室町時代には「原大和入道沙弥有源」が平林郷と風間郷を知行していた(諏訪御符礼之古書)。嘉暦4年(1329)にも諏訪頭役を長池郷地頭の寄子として「原宗三郎入道」の存在が確認される(守矢文書)。「吾妻鏡」文永2年11月20日条に善光寺奉行人4人のうちの1人としてみえる「原宮内左衛門入道西蓮」もこの一族である。中世の平林郷は善光寺奉行人原氏の所領であったことがわかる。

この原氏については、これまでその系譜が知られていない。注目すべきは、「相模国住人原宗三郎宗房」は勇敢の者であったが、早川合戦で大庭景親に同意して頼朝を射たことから逐電して信濃国に在ったが、墨俣川の合戦に参陣させるように信濃国御家人に命が出されている(『吾妻鏡』文治元年10月29日条)。この信濃国に逃亡していた「相模国住人原宗三郎宗房」は建長2年3月1日の「原宗三郎跡」(『吾妻鏡』)や嘉暦4年の「原宗三郎入道」(守矢文書)と、名字や出生順をしめす排行名が一致する。平林郷の原氏が相模国住人であった可能性はきわめて高いといわねばならない。この原氏の性格は不明であるが、『尊卑分脉』によれば、工藤惟仲の子孫が原氏を称し、原四郎清行—原三郎清益—忠安らの系譜が知られ、工藤家光の子息家俊は「住信濃国」とある。工藤二階堂系図では、工藤薩摩守祐長の三男八郎祐氏が坂木北条、四男十郎祐広が坂木南条を相伝したと伝える。事実、浦野荘西馬越郷には薩摩十郎跡の知行があり(信史5-549)、小泉荘にも薩摩氏の知行地があった。坂木南条に薩摩十郎左衛門尉跡、大井荘長土呂郷に薩摩五郎左衛門尉がいた(信史5-70)。坂木北条に薩摩刑部左衛門入道(信史5-294)、春日郷内諏訪神田に薩摩五郎左衛門尉の存在が知られる。⁽⁵³⁾また、伊那春近領小出郷の地頭代として宮藤師能・忠綱など工藤氏の存在が知られる(信史4-163)。信濃では伊那・諏訪・小県・埴科から佐久郡に得宗被官工藤氏一門の存在が多数確認される。

水内郡小井郷には、鎌倉時代、得宗被官片穂惟秀後家の知行地のほか、平入道跡・曾我左衛門尉太郎光頼・諏訪木内左衛門尉入道などの知行分が分布していた。⁽⁵⁴⁾この片穂・平・曾我・諏訪氏らはいずれも得宗被官である。こうしてみれば、平林郷の原氏も得宗被官工藤氏一門の可能性は高い。室町時代になっても平林郷の原氏は存続し、「諏訪御符礼之古書」に平林は「西明寺殿御廟所」とあることが知られている。⁽⁵⁵⁾この点について、「北条氏との関係も考えられるがよくわからない」と

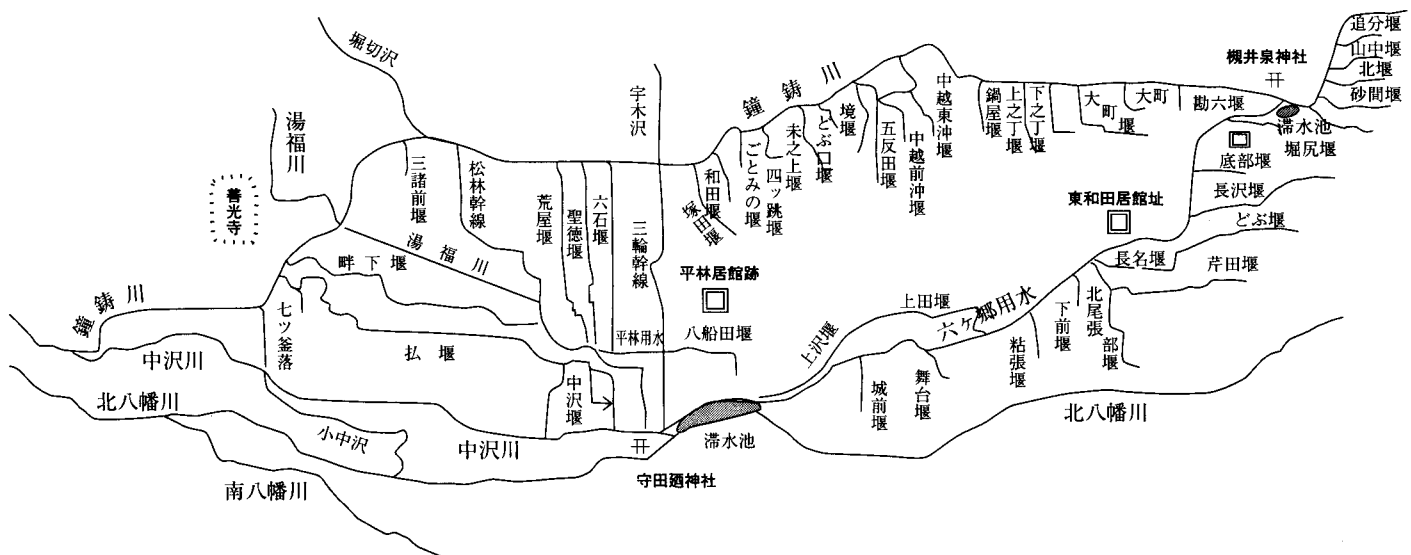


図5 鐘鑄川・六ヶ郷用水図

の見解もあるが、室町時代に最明寺時頼伝承がこの地に存在し、鎌倉～室町期を通じて原氏が存続していることからすれば、平林の地が得宗領であったといえよう。善光寺をはじめ長野市岩石町、同富竹、三水村芋川、須坂市八町・井上には曾我十郎祐成の妾虎御前塚が存在し、曾我伝承が東条莊周辺に濃厚に分布している。この曾我伝承の分布も、小井郷に曾我氏の所領があったことからすれば、史実の一定の反映ともいえよう。善光寺奉行人を勤めた原氏が善光寺膝下の平林と千曲川の渡川点に近い風間郷を知行していたのも、東からの善光寺参詣路を押さえる意味をもっていたといえよう。

六ヶ郷用水の特徴

平林に隣接する西和田・東和田地区は、中世の東条莊和田郷の故地である。この地区の灌漑体系をみると、北部の一部が鐘鑄川の灌漑を受けるのみで大半は灌漑用水が不足する地帯でむしろ畑作地帯であった。しかも、和田地籍の南部一帯には条里地割水田の分布がみられず、自然流路を利用したと思われる部分に六ヶ郷用水が流れ、不整形な地割り地帯を灌漑している（図4）。この六ヶ郷用水は、西和田・東和田・尾張部・南堀・北堀・石渡地区を灌漑しており、この六か村が用水管理組合となっている。

そこで鐘鑄川堰と六ヶ郷用水の系統図を作成すると、図5「鐘鑄川・六ヶ郷用水図」となる。それによると、この六ヶ郷用水の特徴は、第一に善光寺周辺の諸用水の排水を再利用していることが明瞭である。すなわち、裾花川から取水した鐘鑄川堰・中沢川の悪水や自然河川に発する湯福川・堀切沢（松林幹線）・宇木沢（三輪幹線）などの沢水、排水は、すべて北八幡川の中流にある守田廻神社周辺に集中するシステムになっている（図3も参照）。神社の南方が深さ約3m・幅2mほどの北八幡川、北方には中沢川、東側に松林幹線・三輪幹線が流れ込み、旧市街地の排水はすべてここに集中する構造になっている。そのため、神社の東方には巨大な遊水池が作られている。守田廻神社は八幡宮ともいい、頼朝がここに移転させたと伝承するが、あきらかな堰神であることがわかる（図3・5）。

第二の特徴は、この守田廻神社東側の滞水池に集められた排水が、再び六ヶ郷用水として取水さ

れて貴重な用水を再利用するシステムになっていることである。六ヶ郷用水の灌漑地帯がちょうど条里地割の中でも水掛りの不足する一帯に相当している。もともと鐘鑄川堰は、流末の方が取水口よりも標高が高い逆川であり、水量の豊かな川ではなくその維持管理は大変であった。鐘鑄川堰から遠い水田や畑作地帯では水不足であった。六ヶ郷用水はそうした一帯を灌漑し、用水路も自然地形にそって蛇行を繰り返している（図4参照）。あきらかに、六ヶ郷用水は条里地割にまったく規制されていないのであり、条里地割の切れた末端周辺部分を補完する機能をもった用水システムとして、条里地割の規制がなくなった後代になって開削されたことを推測させる。

第三の特徴は、その灌漑地帯が中世の和田郷・高岡・尾張部・石渡・堀郷の地域と一致することである。六ヶ郷用水は、取水口のある西和田が堰守役をつとめ、尾張部地区の分水口には高岡郷の居館跡があり、石渡地区の分水口には常岩寺や石渡居館跡があり、流末の堀地籍にも堀居館跡が残っている。主要な分水口には居館跡が配置されるシステムになっていた。これはあきらかに中世に淵源をもつ用水システムと考えられる。

鎌倉・室町期の六ヶ郷用水開削

では、この六ヶ郷用水の開発・開削はどのような歴史的変遷をたどったのであろうか。嘉暦4年(1329)守矢文書によれば、和田郷は「東条荘内和田郷」とあって東条荘であったことがわかるが、「石渡部・三和条・富武地頭等」や「尾張部郷地頭」はそれぞれの寄郷としてみえるのみで、これらの郷が鎌倉時代に東条荘内であったかどうか不明である。しかし、この六ヶ郷用水の取水口が和田郷にあり、用水組合の触頭が西和田村であったことから、八条院領東条荘和田郷の領主と密接な関係にあった可能性が高い。

善光寺奉行人の一人和田石見入道仏阿（『吾妻鏡』文永2年11月20日条）は、東条荘和田郷の御家人和田氏一門であった。嘉暦4年の守矢文書には東条荘内狩田郷を中心にした和田隠岐入道一門、荘内和田郷には和田三河入道一門、長池郷に和田石見入道一門の存在が知られている。『諏訪大明神絵詞』には和田石見入道の古敵として信濃国住人和田隠岐前司繁有がみえる。この同族と推定されるものが、丸子町霊泉寺阿弥陀像胎内文書にみえる「前隠岐守平朝臣繁長本然」である。この一族は、「六条八幡宮造営注文」に「和田肥前入道跡」とみえ、円覚寺文書にみえる元亨3年(1323)北条貞時十三回忌では「和田隠岐入道」が馬1疋を寄進していることが知られる。八条院領東条荘の和田・狩田郷を中心に勢力をはった御家人和田氏は、隠岐・石見・三河・肥前を受領名とする同族に分派しており、善光寺奉行人を勤めたことがわかる。このうち、善光寺奉行人の和田石見入道の屋敷は、「高岡」にあったことが『とわずがたり』に記載され、東和田館跡がそれに比定する説が有力になっている。この高岡の屋敷は中道に接しており、西和田地籍では中道に沿った字「大道北」「大道南」の地名とならんで「ごちょう」「たかみ」という呼称地名が残っていた。⁽⁵⁷⁾ 善光寺への参道がこの館跡前を通っていた。西和田地籍にも「城前堰」「城」などの地名が六ヶ郷用水に隣接してのこっている。

平安末期～鎌倉時代に東条荘和田郷や高岡が平姓和田氏の所領であったこと、高岡の和田石見入道の屋敷跡に隣接して尾張部地区への分水口があることなどからみても、この用水路の開削に鎌倉期の平姓和田氏が関与していたことは間違いあるまい。

しかし、この用水堰の流末にあたる荘内石渡部・堀・尾張部などの郷までが鎌倉時代の平姓和田氏の所領であった痕跡はない。しかも、流末には、「今井」の字名があり、室町時代の郷名・氏名として確認される（諏訪御符礼古書）。その上、用水路に隣接した常岩寺墓地から「康応元年（1389）10月15日諸人敬白」在銘の中世石塔基礎石が長野市誌編纂の調査でみつかった。この地があきらかに室町時代になって急速に開発され、六ヶ郷用水がこの地まで延長され、「今井」と呼称された可能性を推測させる。

明徳3年（1392）の高梨朝高所領目録（高梨文書 信史7-228）には、「和田郷并高岡」が高梨朝高、「東条荘内石渡部・堀・尾張部散在・小井・吉田村」が高梨与一の所領として記載されている。この史料は六ヶ郷用水の灌漑する和田・尾張部・石渡・堀の郷村地帯の知行人が高梨氏一族によって独占されていたことを示している。この高梨氏は、高井郡を根拠地に水内郡にも勢力を拡大した北信濃有数の国人層として知られている。

以上のことから、鎌倉時代の平姓和田氏による開発努力を継承しながらも、六ヶ郷用水というまとまった用水体系に仕立て上げたのは、室町時代の国人高梨氏一門の地域権力であったといえよう。⁽⁵⁸⁾ 善光寺平の排水を一箇所の遊水帯に集めて二次的に再利用して、条里的水田の周辺部の灌漑用水が不足する地帯を補完するという六ヶ郷用水システムが、室町時代の地域権力によって造成・完成されたというのは、きわめて整合的な理解といえよう。

善光寺平の用水システムは、国衙権力による公領を灌漑するブロックの開発が先行し、松尾社や八条院など権門の開発資本を導入して再開発した荘園ブロックが後発し、さらにその周縁部に室町期に国人らの地域権力によって補完的用水システムが追加されたという三つの要素からなる複合構造をなしていたことを推定することは無理ではなかろう。しかも、前者二つのブロックは条里的水田地帯で、後者は非条里水田地帯となっているのも、室町期の再開発が条里的地割に規制されなかったことを物語っている。

消滅した中世の郷村

こうしてみれば、善光寺平一帯の中世社会は用水不足や土砂災害からの再開発の繰り返しであったといえよう。再開発の資本投資ができなくなり、用水路の維持管理が放棄されれば、中世郷村の荒廃や消滅が繰り返されることになったであろう。

善光寺平で室町・戦国時代の史料にみえる郷や村で、江戸時代には消滅してしまいその正確な位置も不明となったものが散見される。それを整理すれば、次の通りである。

小柳郷	享徳3年代官梨本丹後守満国・稻田道椿	信史8-316
北村郷	天正6年	信史14-299
古野郷	寛正5年	信史8-480
今井郷	文安5年	信史8-242
宮郷	天正6年	信史14-299
北中島郷	明徳3年 応仁2年代官中島長吉	信史7-228
藤倉郷	明徳3年	同
得長郷	明徳3年 代官徳長遠縄	同

中条郷	明德3年	代官寺尾政幸	同
善哉郷	明德3年		同
富長郷	寛正3年	代官井上富長為信	信史 8-448
亘理郷	寛正3年	代官井上政満	信史 8-480

これらの中世郷村は廃村になったものと思われ、その痕跡を見つけるのは困難である。たとえば、小柳郷については現地に何の痕跡や伝承もない。だが、新潟県柏崎市妙聞寺はかつて信濃国高井郡小柳郷島村にあったと伝え、慶長16年信州綿内知行割に「島村」とみえるから、小柳郷は長野市綿内付近にあったものと推定される。⁽⁵⁹⁾ 富長郷は綿内に「富長堰」という堰名を残す。これらは千曲川と保科川の合流氾濫原地帯にあったものと想定される。得長郷は上駒沢と西富竹の間に「字得永」の地名として残り、藤倉郷は若宮と下高田に「字藤倉」および「藤倉堰」があり、古野は桐原に字古野が残り、今井郷は南堀に字今井の地名が痕跡となる。中島・宮・北村などは全く不明であるが前後の郷村の配置からすれば、浅川・駒沢川などの中小河川が千曲川の自然堤防に衝突して後背湿地で氾濫を繰り返す中で消滅したものと考えられる（図2）。他の消滅した中世郷村についても、千曲川周辺とそこに合流する浅川・駒沢川・保科川など中小河川の氾濫原・洪水地帯に想定される。⁽⁶²⁾ 中世の氾濫・洪水・土砂災害の常襲地帯では、悪水払いの用水路開削が困難で自然の猛威のままに任せる以外方法がなかった。自然災害に翻弄され、再開発を断念せざるをえなかった郷村の消滅は多かったのである。こうしてみると、中世社会では土砂災害地帯でも開発が常に先行しており、時代によってその復興と再開発を組織した勢力が国衙から荘園領主、在地領主、国人らへと時代的変遷をたどったものといえよう。

④……………越後平氏諸流による信濃・越後の所領開発

繁雅流平氏・信濃和田氏をめぐる研究史

鎌倉時代、八条院領東条荘内の和田・高岡郷などを知行した平姓和田氏が、東条荘の成立や鐘鑄川堰の再開発、六ヶ郷用水の部分的開削に関与していたことは前章の検討からあきらかであろう。しかし、この繁雅流平氏・信濃和田氏については不明なことが多く定説がない。

『吾妻鏡』元暦元年2月30日条は「信濃国東条荘内狩田郷領主職、避賜式部大夫繁雅訖、此所被没収之處、為繁雅本領之由、愁申故云々」と伝える。東条荘が平家没官領となった時、平繁雅は頼朝に「本領」だと愁訴して「領主職」を認められた。彼が早くから頼朝に提訴しうる強縁を持っていたことが本領を回復しえた根拠であった。

東国荘園の中で領主職と呼ばれた事例では、郡内棟梁といわれた藤原姓足利太郎俊綱が仁安年中に女性凶害によって下野国足利荘領主職を得替されたものが知られる（『吾妻鏡』養和元年9月7日条）。この場合も藤原秀郷後胤の知行であったというから、領主職とは先祖以来の本領主の所職であった可能性が高い。この時期に類似したものとして地主職がみえる。武蔵国住人が「多以本知行地主職、如本可執行之由蒙下知、北条殿并土肥次郎実平為奉行、邦通書下之云々」（『吾妻鏡』治承4年12月14日条）とある。下総国相馬郡で千葉常重男常胤が「地主職」を伝領した事例（櫛木文書 平2586）、藤原助弘が信濃国志久見山地主職を安堵された事例（市河文書 平4143）、上野国

新田荘で源義重が「地主」を理由に下司職に任じられた事例（正本文書 平 2875）が知られる。地主職と領主職との相違点や畿内の地主職との差異は不明であるが、領主職が「本領」との結び付きが強いものとして意識され、鎌倉中期には領家職と呼ばれることは第5章であきらかにする。平繁雅にとって東条莊狩田郷は本領で先祖以来の相伝所領であったといえる。

この平繁雅流と信濃和田氏との関係については、これまで幾つかの諸説が提起され現在も一致した見解をみていない。戦前では、栗岩英治が丸子町霊泉寺阿弥陀仏の胎内文書にみえる「正和四年十一月日前隠岐守平朝臣繁長」（信史 4-601）や諏訪大明神絵詞にある「信濃国和田隠岐前司繁有」は、平姓で受領名が一致し、繁を通字とすることから信濃和田氏一族と繁雅流平氏とは同族であると主張した⁽⁶³⁾。しかし、市村咸人は東条莊領家職を相伝した平氏と莊司の和田氏とは別人とする説をとった⁽⁶⁴⁾。戦後においても、繁雅流は在地領主であり八条院へ寄進した領家は別に存在したと評価する『中野市誌』『小布施町誌』の説がある一方で、繁雅流を中流貴族の系統で領家だと評価する『上高井誌』や片山正行の諸説が対立している⁽⁶⁵⁾。

1950年宮内庁で後深草院女房二条の「とわずがたり」が発見され、正応3年（1290）に彼女が善光寺に参詣し「高岡の石見入道という者」の宅を訪問した記載が注目された。小口倫司はこれを虚構だと主張し、小林計一郎は史実とし、明徳3年高梨朝高注進状写（高梨文書 信史 7-228）に「和田郷并高岡」とあることから、その居館跡を長野市東和田・西和田付近に比定した。羽下徳彦は、三浦和田氏の検討から高井時義一門を信濃国高井郡地頭職を名字の地として武士団を形成したと主張した⁽⁶⁶⁾。この説を前提にして、遠藤巖は康永元年（1342）出羽国山本郡幡江郷に和田石見左衛門尉藏人繁晴（新渡戸文書『秋田県史 資料古代中世』778号）がみえることから、和田石見を名字とする一族が東条莊の信濃和田氏と一致し、この信濃和田氏は「鎌倉初期の三浦和田・高井氏の流れをくむ和田氏とも見受けられる」として平姓繁雅流との系譜関係を否定している⁽⁶⁷⁾。近年、「六条八幡宮造営注文」に「和田肥前入道跡」の存在が紹介されると、三浦和田中条家文書の「桓武平氏諸流系図」にみえる繁雅の弟基繁・繁継をその人物に比定する説が小山丈夫によって提起され、信濃和田氏を平姓繁雅流とする系譜説が復活している⁽⁶⁸⁾。五味文彦はこの繁雅は平頼盛とともに鎌倉に下向し、頼盛領と同じく八条院領東条莊狩田郷を安堵されたものと推定し、繁雅が八条院・平頼盛に仕えるなかで北白河院の後見・乳父の家になり、その一族から文士が搬出したものとした。この平氏一族を「京都に基盤を置く下級貴族」と評価し、鎌倉御家人としての活動や平姓和田氏との関係には言及していない⁽⁶⁹⁾。

こうした諸説の分立は、平繁雅流一門について鎌倉時代における活動の実態が古記録や古文書によって史料的に確定していないこと、鎌倉御家人は幕府にのみ奉仕し公家政権には参加していないという「暗黙の常識」が史実をみる目を曇らせているためと考える。

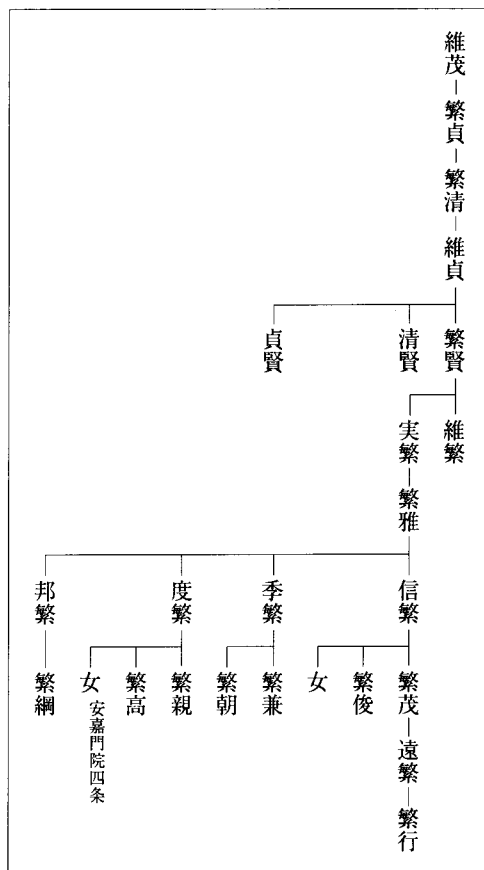
信濃・越後の平氏諸流

そこで平繁雅の系譜をまず『尊卑分脉』にみれば、資料4の通りである。

この一門について検討した松井茂は次の諸点を主張している。余五將軍維茂の嫡子繁貞が寛仁2年（1018）関白道長に馬4疋を献上し（『御堂関白記』）、長暦2年（1038）には越後国司にあてて彼の郎等を追捕するよう命じる宣旨が出ていること（『春記』）、彼の弟繁成は秋田城介となりその

孫永基が越後国住人となりその子孫が越後城氏として活躍したこと、維繁は越後国菅名荘預所となっていること（『吾妻鏡』）などから、この一門が「越後平氏」と呼ぶべき存在であったとする。この見解は、維茂嫡流の繁貞を常陸平氏とする高橋昌明説⁽⁷²⁾よりも説得力がある。しかも、維繁が越後国菅名荘の預所職、繁雅が信濃国東条荘領主職であったことからすれば、この平氏一門が早い時点から信濃・越後に進出して越後平氏ともいえる存在であったことはうなずける。この松井茂説はその後の研究史で具体的に言及されていないが、伊勢平氏や常陸平氏とは異なる越後・信濃における平氏諸流の存在を解明しようとした先駆的な研究として評価すべきであろう。以下、信濃・越後に広まった越後平氏諸流の検討に入ろう。

まず、一門の祖繁賢についてみよう。松井が指摘したように、彼は永久元年（1113）から4年まで検非違使として別当宗忠のもとで活躍した。それより早く康和5年（1103）4月8日に彼は斎院御禊の前駆を勤め（『中右記』）、嘉承2年（1107）

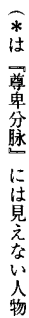


4月2日に賀茂斎宮内親王御禊定で前駆を勤め（『永昌記』）、16日の賀茂詣にも参加し、18日白河院が見物のため土御門内府亭に向いたときも院の寵臣藤原盛重とともに車後に参じている（『永昌記』）。大治4年（1129）7月15日の白河院の葬儀では炬火行事をつとめ、彼は平忠盛・藤原朝隆とともに白河院判官代として明記されている（『中右記』）。伊勢平氏の忠盛と越後平氏の繁賢は、白河院庁で判官代として知己の関係にあった。彼の弟貞賢も元永2年（1119）9月21日に白河院の「北面下臈」としてみえる（『中右記』）。もう一人の弟清賢も大治4年（1129）7月15日の白河院の葬儀では、平正弘とともに掃除行事を担当している（『中右記』）。

伊勢平氏の正弘と越後平氏の清賢はここでも相知る仲であった。伊勢平氏・越後平氏はともに白河院庁に仕える判官代・北面として一緒に活躍していたのである。久安3年（1147）7月18日の鳥羽法皇による「武士等御覧」に「隠岐守平繁賢」が参加している（『本朝世紀』）。この平氏一族は受領になる下級貴族でありながら、院の「武士御覧」に参加する一身分としての「武士」でもあったことに留意すべきである。

繁賢の子息については、『尊卑分脉』は維繁・実繁の二人を記述するのみである。しかし、三浦和田家文書の中に残っている「桓武平氏諸流系図」（以下「系図」）には資料5のようにみえる。

『分脉』と「系図」を比較すると、繁賢の子息を4人あげ、『分脉』にはみえない基繁・光繁がみえ、維繁の子息5人や基繁流の子孫が判明する。特に実繁を「或繁雅」と記載し、『分脉』が実繁の子を繁雅としているのと大きな違いである。また『分脉』にはみえない信繁の子繁澄・繁直、



桓武平氏諸流系図の史料批判

実繁	本朝世紀	久安 3/12/21	修理亮，皇后宮（美福門院）年給
維繁	本朝世紀	康治元/2/21	右衛門権少尉平惟繁
	兵範記	仁平 3/11/26	頼長春日詣の舞人
		閏12/23	檢非違使宣旨
		久寿 2/1/21	頼長大饗の檢非違使
		8/1	近衛院葬儀，檢非違使 山作所

		8/9	同法事 掃除奉行
		保元元/7/10	清盛軍に参会
		2/1/24	除目 従五位下
	吾妻鏡	文治 2/3/13	越後国菅名莊預所隠岐判官代惟繁
長繁	玉葉	治承 3/1/19	除目 玄蕃権助六位上
基繁	玉葉	承安 4/11/17	大原野祭 雑色平基繁取幣
	吾妻鏡	文治元/10/24	南御堂供養 所雑色基繁
	同	文治 2/1/3	鶴岡八幡宮参詣供奉
	同	建久 2/3/13	若宮殿遷宮随兵
	同	建久 5/11/21	三島社参詣供奉
	同	建久 6/5/20	天王寺参詣供奉
繁氏	平戸記	寛元 2/10/4	除目 石見守平繁氏
繁雅	吾妻鏡	元暦元/2/30	東条莊狩田郷領主職 式部太夫繁雅
	同	文治元/10/24	南御堂供養 平式部太夫繁政
	明月記	元久 2/11/30	河内守平繁雅
	後高倉院葬礼記	貞応 2	上北面 繁雅法師
	明月記	寛喜 2/2/8	繁雅入道女院後見
信繁	明月記	嘉祿 2/4/19	女院御乳人信繁母
	同	安貞元/3/11	安嘉門院八幡御幸、御衣調進
	同	同 3/30	細工所、女院より三度信繁如元
	同	寛喜 2/閏1/10	女院御使 関東下向
	真經寺所蔵裏文書	天福元/7/6	信繁法師 仏具類調進
季繁	民經記	寛喜 3/1/6	叙位 従四位下平季繁
	同	1/9	女房大夫局 左馬権頭季繁朝臣猶子
	安楽寿院古文書	年未詳	安芸国田門莊
度繁	民經記	嘉祿 3/8/27	檢非違使別当宣
	同	貞永元/2/7	佐渡守平度繁
邦繁	古文書集	嘉暦元/6/18	備前国長田莊領主職 邦繁繁高父子
繁茂	明月記	寛喜 2/2/8	舞人一臈藏人繁茂
	民經記	嘉祿 2/11/17	五節舞姫 出仕殿上人 平繁茂
	同	同 /12/14	後堀川天皇春日社行幸 舞人右衛門権少尉
	吾妻鏡	文永 3/3/19	蹴鞠一卷勘状 後堀川院御時繁茂
	民經記	寛喜 3/3/16	一臈判官繁茂、御剣盗人逮捕
	明月記	天福元/3/20	定家の使者として為家に連絡
繁成	古文書集	嘉暦元/6/18	備前国長田莊領家職 前石見守繁成
繁俊	民經記	嘉祿 2/8/10	北白河院の藏人兵衛尉繁俊
	経俊卿記	建長 6/7/23	安嘉門院上北面

繁澄	経俊卿記	正嘉元/6/3	和市交易での検非違使
繁高	勘仲記	弘安 6/10/9	安嘉門院御領用途の調進
	古文書集	嘉暦元/6/18	備前国長田荘領主職 邦繁繁高父子
遠繁	勘仲記	弘安 7/11/23	舞人蔵人左衛門尉平遠繁
	昭慶門院領目録	嘉元 4/6/12	浜松荘, 阿多古, 宇布美の知行

こうしてみると、「系図」『分脉』にみえる人物の多くが、院政期白河院から鎌倉期の後宇多院の時代まではほぼ一貫して存続していたことが、古記録・古文書から確認できる。「系図」にみえる人物は『分脉』にもみえるが、『分脉』にみえない長繁、基繁、繁氏らもその存在が史実として確認される。「系図」は『分脉』以上に信憑性が高いことが判明する。野口実は、この「系図」について「本系図はおそくとも鎌倉時代末までに成立していた桓武平氏諸流の系図に三浦和田氏が自家の系譜を書き継いでいったものではなかろうか」とし、平忠常の乱の関係者について、これまで他の系図や史料に見られない記事が記載されていることに注目している。⁽⁷⁵⁾この系図の原本調査によると野口のいうように三浦和田氏を書き継いでいった原本であるとはいえないが、記載内容は確かに白河院政期から鎌倉末期にいたる記載上の人物が古記録や古文書の記載と合致することは事実である。写本だとしても良質のもので、⁽⁷⁶⁾『分脉』よりも古い典拠資料にもとづいた信憑性の高い系図が含まれているといわざるをえない。

こうしてみれば、繁賢流越後平氏の一门は白河院庁から鳥羽・後白河・後鳥羽院政の下はもとより、承久の乱の時代を越えて後高倉・後堀川院政・亀山院にいたるまで一貫して諸大夫・北面として存続していたことがわかる。

京方御家人としての平姓和田氏

そこで信憑性が高いことを確認した「桓武平氏諸流系図」と古記録により、平繁雅の越後平氏諸流と信濃平姓和田氏との関係について検討しよう。

まず、隠岐守平繁賢の子息が「系図」では4人、『分脉』は2人である。平維繁と実繁は両方にみえるが、基繁と光繁は「系図」にのみみえる。このうち、基繁が隠岐を号し、信濃平姓和田氏の受領名と一致するから、まず両者の関係について検討しよう。

基繁は「系図」には隠岐雑色、美福門院侍長とある。父繁賢が隠岐守であったから、隠岐を号したのであろう。彼自身が隠岐守であった史料はない。雑色については『玉葉』承安3年(1173)2月4日条の大原野祭に「幣取 雑色平基繁」とみえ、翌年11月17日の大原野祭でも同様の役をつとめている。高倉天皇の蔵人所雑色であり、美福門院の侍長であったのも事実といえよう。小松茂美によって紹介された『後白河院北面歴名』には「蔵人所雑色 平基繁」とあり、後白河院北面であったことが判明する。⁽⁷⁷⁾

しかも、彼は頼朝の御家人にもなっている。文治元年(1185)10月24日頼朝が父義朝の遺骨を南御堂勝長寿院で供養した際に、五位六位の参加者として「所雑色基繁」と「平式部大夫繁政」がみえる(『吾妻鏡』)。彼は後白河院北面で所雑色のまま頼朝の御家人になっていたものであり、「繁政」も平式部大夫繁雅にまちがいない。基繁の御家人としての活躍は、文治2年正月3日鶴岡八幡宮参詣供奉、建久2年3月13日若宮殿遷宮随兵、建久5年11月21日三島社参詣供奉、建久6年

5月20日洛中から天王寺参詣供奉と連続して確認できる（『吾妻鏡』）。基繁や繁雅は二人とも頼朝近習であったことはまちがいない。繁雅が一度は東条莊狩田郷を没収されながら、愁訴して領主職を安堵されたのは、彼が早くから頼朝の御家人になっていたからであろう。したがって、基繁も鎌倉御家人で後白河院の北面・藏人所雑色でもあったから、繁雅同様に同族として信濃国東条莊に所領をもっていた可能性は高い。

基繁の嫡男繁継は、「系図」に「正五位下・肥前守・左兵衛尉・宣陽門院長・殷富門院藏人、出家住信乃国」とある。彼が信濃に居住したのは、所領が信濃にあったためであろう。彼の名は『後白河院北面歴名』に無官として「平繁継 基繁子」とみえる。「系図」の記載が実証される。父子とも後白河院北面であった。しかも、繁継は肥前守を受領名としたとある。「六条八幡宮造営注文」に「和田肥前入道跡」とみえるのも当然といえよう。

繁継の嫡男繁氏は「系図」に「從五位下 石見守 北白河院藏人」とあり、その子息時繁がみえる。『平戸記』寛元2年（1244）10月4日除目に「石見守平繁氏」として確認される。彼も石見守という受領に補任されていた。

こうしてみると、平繁賢—基繁—繁継—繁氏の系統は、隠岐・肥前・石見の受領となり、信濃に居住するものが確実に存在していた。しかも信濃国東条莊に領主職をもつ繁雅と同族であった。鎌倉御家人平姓和田氏が東条莊の和田、長池、狩田郷などを所領として、隠岐・肥前・石見・三河を受領名とする諸氏に分岐していた事実とよく符合する。『平戸記』にみえる石見守平繁氏の系統が和田石見入道で、善光寺奉行人和田石見入道仏阿もその一門とみてまちがいない。「とわずがたり」は善光寺参詣の際に「高岡の石見の入道という者あり、いと情ある者にて歌常に詠み管弦などして遊ぶとて、かたえなる修行者、尼に誘われて罷りたりしかば、まことに故ある住ひ辺土分際には過ぎたり」と記述する。この一族が善光寺奉行人で鎌倉御家人でありながら、公家政権にもつかえ石見守となり北白河院藏人として京都御所に奉仕する中級貴族であればこそ、後深草院女房二条の目からみても、その住居が「辺土分際には過ぎたり」というほど京都風であったのも当然といえよう。和田石見入道繁氏によって京都文化が高岡郷に導入されていたことからすれば、その居館造営技術が周辺の用水路の開削・維持・管理にも適用されたのも当然といえよう。高岡の比定地は、鐘鑄川堰と六ヶ郷用水の両方の灌漑地帯であるが、水不足の地で戦前においても畑作地帯であった。高岡居館跡と推定される東和田館跡に南西に六ヶ郷用水の分水口があったことは前述した。

『諏訪大明神絵詞』には和田石見入道の古敵として信濃国住人和田隠岐前司繁有が登場するが、彼についてはこれまで全く知られなかった史料がある。『経俊卿記』嘉禎3年（1237）12月26日条に、安嘉門院新御所への移徙に際して「平繁有」が殿上人として供奉している。仁治3年（1242）の「四条院葬礼記」（『群書類従』29）には、諸大夫として「繁有平左衛門大夫」がみえる。安楽寿院古文書「莊々所済事」の安芸国田門莊に「長季—季繁—繁有—前左大臣家」とあり、この繁有が四条院葬礼記の諸大夫平繁有であることは、福田以久生が触れている⁽⁷⁸⁾。彼の名は「系図」にはみえないが、繁賢が「隠岐判官」、嫡男維繁も「隠岐判官代」、二男基繁も「隠岐雑色」であり、しかも「繁」が通字であり、隠岐前司繁有も平姓繁賢流とみてまちがいない。季繁は「系図」にも『民経記』にもみえることは前述した。この一族は、安芸国田門莊にも所領をもっていたのである。

この隠岐を名乗る平氏一族は丸子町霊泉寺阿弥陀像胎内文書に正和4年（1315）「前隠岐守平朝

臣繁長本然」とみえ、元亨3年（1323）鎌倉円覚寺での北条貞時十三回忌に「和田隠岐入道」が関与しているから、公家政権に奉仕しながら鎌倉末期まで御家人でもあったことがわかる。

以上から、鎌倉中期から善光寺奉行人となり東条荘内の諸郷の一分地頭としてみえる信濃和田氏は平繁雅と同族の平基繁流であり、彼等は白河・鳥羽・後白河院庁の判官代・北面でありながら、鎌倉幕府が成立するといち早く頼朝の御家人となった。鎌倉時代になっても御家人である一方で、後白河院北面、殷富門院藏人、北白河院藏人、四条院の諸大夫として連綿として公家政権に奉仕する中級貴族であったといえよう。平基繁流は御家人としては信濃平姓和田氏として登録されていた。このような長期にわたる公武政権との両属関係は、六波羅探題に奉仕する「在京御家人」や、承久の乱の際に公家政権側で戦った「京方武士」の存在とは異質であり、京方御家人という新しい概念で呼ぼう。彼らは京都にのみ居住したのではなく、地方にも「辺土にはすぎた」居館を構え、都鄙間の臍帯をもった地方の所領をもっていた。彼らは鎌倉御家人でもありながら、京都にも留住し院や女院の近臣として奉仕する院侍であり中級貴族でもあった。京方御家人は京都文化を鄙に持ち込み都鄙間を往復しつつ生活しており、中世地方文化の担い手でもあった。

⑤……………鎌倉期における京方御家人の活躍

院近習としての繁雅流平氏

京方御家人との分析概念が必要なことをより明確にするため、越後平氏諸流の具体的な活動実態をあきらかにしておきたい。

頼朝の御家人であった繁雅とその一門は、公家政権の中で、どのような活動を展開したのであろうか。繁雅は元久2年（1205）11月30日に「河内守平繁雅」（『明月記』）、貞応2年（1223）「後高倉院葬礼記」には「上北面 繁雅法師 信繁 季繁 光賢法師 良慶 下北面 永観 度繁 保景 有季 資季 長季」とみえる。繁雅と信繁・季繁・度繁の父子が後高倉院の北面であったことが確実である。さらに、『明月記』寛喜2年（1230）2月8日条には「繁雅入道女院御後見、此晝終命」とあり、彼がこの日死去したことが確認される。嘉禄2年（1226）4月19日条には「女院御乳人信繁母、宣旨殿局に参じ数日居住」ともあるから、繁雅妻＝信繁母が女院の御乳人であった。繁雅夫妻が後見・乳母として養育した「女院」は北白河院陳子に相当することが井上宗雄・五味文彦らによって指摘されている⁽⁷⁹⁾。北白河院陳子は持明院家藤原基家と平頼盛女との間に生まれた娘で、後高倉院の妃であった。「系図」に繁雅は「河内守 持明院河内入道と号す」とあるから持明院殿にいたのであろう。女院後見の繁雅一門が、北白河院の実家持明院家とも密接な関係にあったといえよう。平繁雅は平頼盛との関係から持明院家に仕え、北白河院の乳人になり女院の後見でもあったと推測してまちがいなさう。頼朝の御家人になったのも、五味説のごとく平頼盛との関係を縁とした可能性が高い。承久の乱以後、幕府と朝廷との協調体制の中で、両政権と主従関係を結ぶ京方御家人が一層活躍の舞台を広めていたといえよう。

繁雅の子息信繁についても、『明月記』によれば、安貞元年（1227）3月11日安嘉門院の八幡御幸に際して信繁法師が御衣を調達し、同年3月30日には細工所を預けられている⁽⁸¹⁾。寛喜2年（1230）閏正月10日には女院御使として関東に下向しているし、同3年9月15日には天王寺の件

で尊性法親王への使者ともなっている（『明月記』）。彼は、北白河院の子尊性法親王書状にも度々登場しており、関東に下向して北条泰時との交渉にも従事している⁽⁸²⁾。尊性法親王は、この時期の朝廷・幕府交渉の中できわめて重要な役割を果たしており、そこに平信繁が関与していたのである。『分脉』によると、持明院基盛の子基長は「左中將 従二位 母平信繁女」とあり、基盛の妻が平信繁女であったことがわかる。言い換えれば、平繁雅流は、信繁の代になって北白河院陳子の実家である持明院家の基盛—基長と姻戚関係に入ったのである。本郷和人は、後高倉院の院宣の奉者であった藤原光俊は繁雅女を妻とし、その子光成も信繁女を妻としており「光俊の家と平信繁の家とは密接な関係にあった」ことを指摘している⁽⁸³⁾。後高倉院・女院や院側近らと平繁雅・信繁とが人的結合関係にあったことはまちがいない。

繁雅の次男季繁については、『民経記』寛喜3年（1231）正月6日条に「従四位下平季繁」が確認され、北白河院御所の持明院殿で女院が召し仕う女房大夫局が「左馬権頭季繁朝臣の猶子」（『民経記』寛喜3年正月9日条）とある。季繁も北白河院の女房を出していた。彼が安芸国田門荘に所領をもっていたことは前述した。

三男度繁も『民経記』貞永元年（1232）2月7日条に「佐渡守平度繁」とみえる。『分脉』ではこの度繁の子に繁高や女四条がいた。「系図」では、繁親・繁仲・繁宗の男子のみをあげ、繁高や女子の記載はない。しかし、繁高が安嘉門院庁官であり、六条院領の管理に関係することは後述する。この女四条も安嘉門院女房で藤原定家の子為家の後妻、為相の母で『十六夜日記』『うたたね』の作者である。彼女については、国文学・和歌史の詳細な研究があり、それによると、父平度繁は実は養父であり、祖父繁雅の妻は北白河院の乳母で、その家系は権門に出入りする下級武官貴族で北白河院や安嘉門院に出仕したものとされている。岩佐美代子や福田秀一は、四条の父度繁を養父とする説で「遠江守としてここに住んだ」と指摘し、四条は「養父が在任中親戚のような関係になった人々」と再会したのだとする⁽⁸⁴⁾。五味文彦は嘉元4年（1306）6月12日昭慶門院領目録（竹内文平所蔵文書 鎌22661）に一族の「遠繁」とあることから、「父度繁は当時、浜松荘の預所であってしばしば荘園の経営のために下っており、また阿仏尼はその地の豪族を乳父として成長した」という大胆な仮説を提起している⁽⁸⁵⁾。最近、田淵句美子は『うたたね』以外に度繁を養父とする史料がないことや度繁が「京都に基盤を置く下級貴族であって、遠江にいて上洛するような豪族ではない」との五味説に依拠して、度繁を養父とのべたのは作品上の物語的虚構であって『うたたね』の虚構性とかかわるという新説を提起している⁽⁸⁶⁾。たしかに、『統古今集』に「父平度繁朝臣遠江の国にまかれりけるに、こころならず伴ひて、鳴海の浦をすぐとてよみ侍りける」とある。ここから、岩佐らは度繁が遠江守であったと推測している⁽⁸⁷⁾。

しかし、度繁は佐渡守であって遠江守になった史料はない。また、五味が注目した嘉元4年（1306）6月12日昭慶門院領目録（竹内文平所蔵文書 鎌22661）には

「浜松荘 前左大臣 遠繁」「遠繁朝田阿多古 持明院三位入道 宇佐美郷 遠繁」

とみえる。浜松荘には平遠繁だけではなく、前大臣や持明院三位入道家藤の知行も存在していた。この前大臣に関して、亀山院凶事記によれば室町院領遠江国浜松荘は嘉元3年7月26日亀山院が年来芳志の代償として前右大臣西園寺公衡に相伝領掌をみとめ、「本家役不可有懈怠之状」を命じている（『静岡県史 中世史料』1564号）。院による恩領安堵が本家役勤仕を義務づけるものであ

ったことに留意する必要がある。目録の「前左大臣」が前右大臣西園寺公衡の誤りであることがわかる。遠繁も『勘仲記』弘安7年11月23日条に「蔵人左衛門尉平遠繁」とみえ、亀山天皇の蔵人であったから、亀山院領浜松荘の一部を知行していたのである。朝田郷と宇佐美郷が平遠繁、阿多古郷が持明院三位入道家藤に与えられていた。平繁雅流・西園寺家・持明院家などいずれも幕府・将軍家と関係の深い一族の所領が遠江国浜松荘内に分布していた。西園寺家は浜松荘を知行しながら亀山院へ本家役2万正を上納する義務を負ったから、かつての領家職か預所職であった可能性が高い。しかし、繁雅流や持明院家も同様であったかどうかは疑問である。この時期には職の体系が変質し、荘内郷村の上分料が知行として公家関係者に分割配分されていたと考えざるを得ないから、それら関係者の所職がどのようなものか別途の検討が必要であろう。

では、この遠繁による浜松荘内の知行はいつからはじまるのであろうか。遠繁の父繁茂について「系図」では「五位雑色、後堀川院御時北面并近習也」とある。『明月記』寛喜2年2月8日条に「舞人一臈蔵人繁茂」とみえ、『民経記』嘉禄2年11月17日条では五節舞姫で殿上人として出仕し、同年12月14日の後堀川天皇の春日社行幸にも参じた。寛喜3年3月16日条では、内裏で天皇の御剣が盗難にあった騒動で盗人を逮捕している。彼が後堀川天皇の蔵人であり、後堀川院の近習であったことはまちがいない。祖父信繁は前述したごとく安嘉門院御使にもなっており、浜松荘も安嘉門院領であり、亀山院に伝領されたことは後述するごとくである。こうしてみれば、浜松荘の知行も信繁—繁茂—遠繁と相伝されたものと考えるのが自然であろう。したがって、遠繁の浜松荘における知行は祖父信繁以来の権限と考えられる。信繁は、阿仏尼の父度繁の兄にあたる。五味説のように、度繁を浜松荘の預所と推定することは無理であろう。

阿仏尼・四条が『うたたね』にいうごとく十代の失恋で「浜名の浦」を訪ねた時は、彼女の叔父信繁が浜松荘に所領をもっており、父度繁も兄信繁の所領を縁に遠江に下向したことがあったと考えるのが自然ではなかろうか。『十六夜日記』では建治3年(1277)関東に下向した際「浜松」で「その世に見し人の子や孫」に出会っている。信繁の孫こそ、浜松荘の朝田郷と宇佐美郷を知行した平遠繁にあたる。この一族が越後平氏であったことはまちがいない。

四男邦繁については、嘉暦元年6月18日前石見守繁成備前国長田荘本家職寄進状に「於領主職者、邦繁一円不輸、可子孫相伝之旨、依被仰置、無片時狼喉、邦繁・繁高父子二代知行之処」とある。⁽⁸⁸⁾この史料には「至領家職等者、繁成等任相伝、子々孫々可令知行領掌之旨、欲預御契状矣」ともあるから、領主職が鎌倉後期に領家職に再編成されていることがわかる。前石見守繁成は備前国長田荘領主職＝領家職を相伝してきた邦繁・繁高父子の子孫であったことがわかる。邦繁の父繁雅が信濃国東条荘で狩田郷の領主職を相伝していたことからすれば、この一門が所持していた領主職は後代の亀山・後宇多院の代になってから領家職と呼ばれるように再編成されたものであったことがわかり興味深い。⁽⁸⁹⁾

この史料は亀山院・後宇多院による伝領争いにより意に反して所職を召し放たれ、本家職も大覚寺大金剛院に移ったことを不満とした繁成が、公武政権への訴訟を取下げ自らの領家職相伝を公認する契状の発給を条件に本家職を寄進する形で承認したものである。中田薫が「職権留保付領主権寄進」とは別に「本家職寄進」と類型化したものと同類であるが、本家がなぜ本家職をもつようになるのかの研究課題を我々に提起する事例といえよう。

「本家の号を以て臨時課役を懸け、仰せ事を左右に寄せ所務を相綺い、地下の違乱を致されれば、本証文の旨に任せ、本家の号なく知行致すべき也」との主張にみえるように、この時期には本家職の知行・管領は領家職以下の下級所職の相互了解・契約の中で承認されるべきものとする双務関係の社会意識が強固になっていたことがわかる。繁成が亀山・後宇多院ら本家に対してこのような強い態度をもって交渉しえた背景には、この一門が歴代の院・女院の家政職員であるとともに幕府の御家人でもあり、公武政権に強力な人的ネットワークがあったことによるものといえよう。

『尊卑分脉』『系図』では邦繁の子は繁綱をあげるのみで、繁高は邦繁の兄度繁の子としてみえている。一族間で猶子に入ることは一般的であったから、邦繁の子繁高が伯父度繁の猶子に入ったとみれば世代的に矛盾はない。こうしてみれば平邦繁・繁高は父子であり、最勝光院一押小路内親王一式乾門院領として伝領された備前国長田荘の領主職であった。式乾門院利子内親王は、母北白河院藤原陳子と父後高倉院の子で安嘉門院邦子内親王と姉妹にあたる。平繁雅が北白河院の後見であり、その子信繁・季繁・度繁も安嘉門院の家政職員を輩出させていたし、安嘉門院領遠江国浜松荘を信繁—繁茂—遠繁と相伝していたことからすれば、邦繁・繁高父子が姉妹の式乾門院領備前国長田荘領主職を相伝していたのも当然といえよう。この一門が北白河院・安嘉門院・式乾門院という女院といかに密接な関係にあったかを物語っている。

以上の検討から、「繁」を通字とした平繁雅の子孫は、源平騒乱や承久の乱を乗り切って鎌倉御家人となり、その子孫が平姓信濃和田氏として信濃国東条荘に所領をもち善光寺奉行人になり御家人の役をつとめていたこと。その一方で、その子孫は公家政権の院北面や蔵人として、また北白河院や安嘉門院・式乾門院など女院後見や院庁官として活躍し、北白河院の実家持明院家とも姻戚関係を持ち続けながら公武両政権を股にかけて安芸国田門荘や遠江国浜松荘・備前国長田荘などを所領としていたことが判明する。これまでも本郷恵子『中世公家政権の研究』に代表されるように地下官人層や中級貴族らの子女が院・女院の女房や侍となって活躍したことはあきらかにされている。しかし、基繁・繁雅は、京都では中級貴族でありながら鎌倉では頼朝の御家人として活躍しており、その子孫が後高倉院や北白河院等の女院女房や侍を出していたことは指摘されていない。考えてみれば、後高倉院自身が幕府に擁立されたのであるから、こうした京方御家人の存在は当然ともいえ、中級貴族や諸大夫・侍らについて詳細に検討すれば、幕府と公家両政権に奉仕する存在はほかにも解明することができよう。

最近では亀山院政以後の公家政権が武家政権と共同歩調をとりながら政策遂行をおこなっていたことが、本郷和人や海津一郎・市沢哲らによって指摘されている。⁽⁹⁰⁾そうした歴史的前提として、鎌倉前・中期においても公家・武家両政権に主従関係をもった京方御家人のような両属関係をもった存在が大きな役割を果たしたものと見えよう。かつて、私は島津家の始祖である惟宗忠久が幕府・公家両政権と両属関係にあった点を指摘したが、⁽⁹¹⁾それは中原信房や今回とりあげた繁を通字とする越後平氏諸流の一族とも共通している。京方御家人との概念を設定して、新しい御家人像を解明する必要が急務だと考える。公家政権と武家政権とが並存していたとする歴史像から早く脱却して、両者が共同執行している中世の国政構造をあきらかにする必要がある。

持明院家の人的ネットワーク

繁雅夫婦は北白河院・安嘉門院の後見であり持明院河内入道を称した。その子信繁も女院の実家持明院家と姻戚関係にあった。この北白河院や持明院家とは、どのような一門であったのだろうか。公家・幕府両属関係を利用して活躍した新興貴族の存在形態についても整理しておきたい。

北白河院陳子は中納言持明院基家と平頼盛女との間に誕生した。のちに後高倉院の妃で後堀川天皇を生み国母となったので、基家が持明院の祖とされる。基家は「馬芸鷹生小弓を以て家業となす」といい、祖父基頼が「武略に達し、弓馬を嗜み鷹犬を好む」という軍事貴族であった。この基頼は越前守・能登守・常陸介を歴任し出羽・常陸・北陸凶賊を討つため鎮守將軍宣旨を受けたと伝えている（『尊卑分脈』）。基頼は康和年中に持仏堂を建立し持明院と号し、大藏卿まで上った息子通基が九品仏を奉安して寺号を安楽光院に改め、基家に相続した。この安楽光院は基家の女北白河院に伝領され、彼女が嘉禎4年（1238）10月3日に死去したあとは、安楽光院御八講が後堀川院にとって母を供養する重要な仏事になった。仁治3年には「安楽光院御八講、公家御沙汰たるべきか否か」が大きな政治問題になり勅問御教書がだされている。安楽光院は持明院家の結集の氏寺としてだけではなく、後堀川院にとっても国母の寺院として重要な官寺になった。この安楽光院と持明院殿が伏見上皇に伝領され持明院統の所有となったことについては、近藤成一があきらかにしている。⁽⁹⁴⁾こうしてみれば、藤原基頼から基家につづく持明院家は、院政期において源平とならぶ武士の家柄であつたらしい。最近高橋昌明は、文芸を特質とする常識的貴族像は一面的で「武勇に堪へたる五位已下」の軍事貴族が存在し、侍身分とは区別されていたことを主張する刺激的問題提起をおこなっている。⁽⁹⁵⁾高橋のいう軍事貴族は桓武平氏・清和源氏・秀郷流藤原を指しているが、中御門流藤原氏の一部が院政期においても軍事的性格を有していたことは、高橋のいうごとく常識的貴族像に反省をせま一例かもしれない。

この基家の母が待賢門院女房で上西門院の乳母であった。基家が久安4年正月28日能登守（『本朝世紀』）、保元元年正月21日美作守（『兵範記』）になっており、治承3年11月19日に右京大夫、寿永元年1月3日に51歳で参議になった。寿永2年（1183）11月28日義仲のクーデターで法性寺殿襲撃と院近臣の解任事件がおきると、解任名簿の第一に基家が挙げられ「その外、基家卿并同家人相交歟、各所領を召し取らるべく云々」（『吉記』寿永2年11月28日条）とある。このとき、基家は家人を含めて解任され、しかも所領まで没収されたのである。基家は反義仲派の代表的人物だった。寿永3年4月2日に太宰大貳実清・大藏卿高階泰経らが還任された（『吉記』同日条）のに、彼や中納言朝方らの還任は9月18日までズレ込んでいる。文治4年10月14日ようやく権中納言にのぼり、翌5年7月10日には辞して所帯を保家に譲っている。

この義仲クーデターでなにゆえ基家のみが家人とともに所領まで没収されたか不明であるが、興味深いのは基家の所領が義仲の軍事的基盤であった信濃国佐久郡に所在していたことである。大徳寺文書「信濃伴野莊并下総葛西御厨相承次第」（『大日本古文書』家わけ同649）によれば、信濃伴野莊と下総葛西御厨は持明院基家一女北白河院一式乾門院一室町院一伏見院一新院と伝領された。この点について、阿部猛は後白河院領であった伴野莊がいかなる経過を経て基家に伝えられたか不明とし「平安時代に藤原氏の莊園であったものが皇室に寄進され後院領になったもの」と推定している。⁽⁹⁶⁾

しかし、この見解は『吉記』の記事を踏まえない議論で基家の所職を誤解している。後醍醐天皇は建武2年10月23日に伴野荘領家職を大徳寺に寄進し、宗峰妙超は領家地頭両職を獲得することになった。「相承次第」はこの領家職継承にともなってその関係文書として大徳寺が所蔵することになったものと考えらるべきである。基家の所職は信濃伴野荘と下総葛西御厨の領家職であり、院御領とは競合しない。彼の権益は寿永年間に所領を没収される以前からのものであったとかがえるべきであろう。

下総国葛西御厨については、『鎬矢記』の史料は疑問が多いものの葛西清元の寄進は史実で12世紀初頭とする見解が通説であった。⁽⁹⁷⁾最近では『鎬矢記』の史料批判から大徳寺文書の基家を九条基家に比定し、葛西御厨の成立を13世紀初頭とする説が主張されている。⁽⁹⁸⁾しかし、北白河院の父は持明院基家であり、九条基家とするのは誤である。持明院基家による葛西御厨知行は12世紀には実現していたと考えざるをえない。彼の所領形成については今後の研究課題ではあるが、平頼盛との姻戚関係も考慮にいれなければならない。頼盛は常陸介を歴任し関東との関係も深い。越後でも文治2年乃貢未済注文にみえる二位大納言家領の志度野岐荘・弥彦荘は、池大納言平頼盛領であることが指摘されている。⁽⁹⁹⁾平繁雅流と平頼盛との関係が背後にあったことと推測される。基家が軍事貴族で信濃や下総に所領をもち平頼盛とも姻戚関係にあったから、信濃・上野を基盤に軍事力をもっていた源義仲と早くから対立した可能性も高い。

基家の所領は、その後、娘北白河院陳子に伝領された。平頼盛領も池大納言家として頼朝から保障されるから、両者の系統は源平騒乱を乗り切ったことになる。嘉禄2年(1226)5月19日に安嘉門院が北白河院の持明院殿に御幸したとき、持明院中将基氏が供奉した(『民経記』)。この基氏は園を号すが、その娘3人が安嘉門院女房となり二条・近衛・三条局となっていた。持明院家の子女が、北白河院・安嘉門院の女院庁を支えていたのも当然である。佐久伴野荘・葛西御厨が持明院基家からその娘北白河院に伝領され、さらに女院の娘式乾門院利子内親王に相伝された。女院領としての相伝も、これらの所領が皇室領から女院に譲与されたものではなく、女院が実家の家領を相続したことに起因するものと考えらるべきであろう。最近研究が活発化している女院領については、天皇家の関係だけでなく、実家から伝領した公家領とを相対的に区別して議論する必要がある。

女院をめぐる人的ネットワークは、公家武家両政権をこえて張り巡らされていた。豊後国岡田帳(内閣文庫所蔵 鎌15701)によれば、宇佐宮領田原本郷は「本守護所豊前大炊助入道女子持明院別当之後室之跡」とあり、書曲村や新荘も「豊前大炊入道殿女子持明院別当入道室家之跡」とある。つまり豊前大炊入道殿=大友(中原)親秀の女子が、持明院別当入道=持明院中将基氏の後室になっていた。持明院家は、豊後の守護大友氏とも姻戚関係にあったのである。持明院家が鎌倉後期になって將軍家に仕えた月卿雲客となるのは、それ以前から京方御家人の平信繁や豊前守護大友氏との姻戚関係が前提にあったものといえよう。持明院基盛は関東御領丹波国大沢荘本司方地頭職を相伝した人物で、持明院家が鎌倉將軍家に仕えた月卿雲客の一人でその奉仕の代償として関東御領が与えられたものと指摘されている。⁽¹⁰⁰⁾信濃和田氏と同族の平姓維繁流が進出していた越後国菅名荘では荘内寺沢条に近衛局という鎌倉將軍家御所に仕える女房の所領があった(松雲公採集遺編類纂古文書)。笈雅博によれば、この近衛局は持明院家出身で関東御領を給分として与えられていたとい⁽¹⁰¹⁾う。持明院家という中流貴族が鎌倉期の朝廷と幕府の両者といかに複雑な人的ネットワークの

網の目をもっていたかが知られる。公家武家両政権を融合させていた社会的存在の解明が必要である。

維繁流越後平氏と六条院領

繁賢にはこれまで検討した基繁らのほかに維繁という嫡男がいた。この維繁流越後平氏は越後国菅名荘を有しており、しかも、その活動は信濃よりも早い時期に展開されたい。以下その検討に移ろう。

『吾妻鏡』文治2年3月13日条によれば、六条院領越後国菅名荘は「預所隠岐判官代惟繁」であった。平維繁は『分脉』によれば「右衛門尉、仁安二年三月三日卒」とあり、鳥羽・後白河院政下の人物である。その生存中の活動は、松井茂論文が指摘するもの以外では、『兵範記』仁平3年(1153)閏12月23日には検非違使とみえ、久寿2年(1155)正月2日頼長が東三条殿で正月大饗を復活したとき、検非違使として参加している。いずれも頼長との関係が強かったらしい。しかし、同年8月1日近衛院の葬送では検非違使として工・人夫を引率して山作所の任を勤めている。保元の乱で後白河天皇の勅定に従い参陣し、謀反人兼長・師長らの領送使を勤めたことは松井の指摘通りである。⁽¹⁰²⁾ 頼長と近かった彼は保元の乱で後白河天皇方に参陣し没落を免れ、翌2年正月24日の除目では「従五位下」となっている。伊勢平氏の平正弘と越後平氏維繁との分岐点はこの保元の乱にあった。

その彼が、なにゆえ六条院領越後国菅名荘預所職を獲得したのであろうか。六条院は別名六条御所とも呼ばれ、白河上皇が承保2年藤原顕季に新造させて長女郁芳門院是子内親王の御所としたが、嘉保3年(1096)8月7日内親王が死去するとこれを六条御堂とし、承德元年(1097)10月14日に御堂落成供養をおこなった(『中右記』)。永長2年(1097)8月25日六条院御領注文(東大寺文書 平1382)は、隠岐守平正盛が伊賀国山田・鞆田村を寄進した坪付として著名なものである。平正盛が伊勢神宮祭主大中原親定や東大寺と相論しながら私領を六条院に寄進し白河院と私的關係を設定したことがあきらかにされている。⁽¹⁰³⁾ しかし、六条院領と平氏との関係については、正盛・忠盛との関係が指摘されるのみで、それ以外の平氏諸流との関係はあきらかにされていない。龍肅も指摘するように「正盛は伊勢平氏一流において嫡流であるでもなく、その父正衡の如きも多くの兄弟の間において殊更に優れた地位を占めておった形跡も見えぬ」という通りである。したがって、当然、他の平氏諸流も正盛と同様に六条院領として私領を寄進し、券契を尋ねて立券された所領が多かったと考えられる。維繁流越後平氏が菅名荘を六条院に立荘した可能性は高い。

ではそれはいつか。院が御願寺領荘園の成立に際して寄文を「尋沙汰」して券契を尋ね院領荘園を確定していった具体的事例は、後白河院による承安3年(1173)最勝光院領の場合が典型的である(『吉記』)。六条院領の場合にも、六条御堂の設立時点にあわせて院領荘園が公認された可能性が最も高い。しかも、院辺の人が院や女院に寄進しその子孫が預所職を確保する事例は東国や北陸でも指摘できる。藤原周衡は私領を待賢門院の法金剛院に寄進し、娘の周子が越前国河和田荘預所職に安堵されている(仁和寺文書 平2310・同2417)。藤原通憲は上総国橘木社を鳥羽院御願寺安楽寿院に寄進し、娘二位局が預所職となっている(報恩院文書 平3052・3120)。寄進主体の子孫が預所職を保持・相伝する事例が窺える。鳥羽十一面領越後国佐味荘・大面荘の荘園立券に際して、

院近臣で越後の知行国主藤原家成・成親父子が積極的に関与していた。⁽¹⁰⁴⁾越後における院近臣の知行国主と荘園立券の関係については最近高橋一樹や丸山仁が検討・整理している。⁽¹⁰⁵⁾

越後国菅名荘の場合も、時期的にみて維繁自らが直接この六条院領の立券に関係した可能性は少なく、むしろ白河院政期に活躍した彼の父繁賢が所領を寄進した可能性が高い。平繁賢は前述したごとく平忠盛と同じく白河院判官代であり、弟貞賢・清賢も白河院北面であった。したがって、白河院判官代であった平繁賢が券契を尋ね白河院の命で造営された六条院に寄進・立荘し、その子息維繁を預所職にしたと考えるのが自然である。⁽¹⁰⁶⁾

この地方の六条院領としては越後国佐橋荘と信濃国千国荘がある。前者は乃貢未済注文に「一条院女房右衛門佐局沙汰」とある。この女房は『吾妻鏡』文治4年2月2日条にみえる「右衛門佐御局、信濃国四宮荘地頭不進弁年貢領家得分由事」と同一人物と考えられる。⁽¹⁰⁷⁾八条院女房右衛門佐局が六条院領越後佐橋荘と仁和寺領信濃国四宮荘の領家であり、彼女が越後佐橋荘や信濃四宮荘の六条院領の立荘に関係したことはまちがいない。

六条院は平治元年10月に火災にあったが（万寿禅寺記）、建久元年4月26日に後白河院は頼朝に宛てて院宣を発し、六条院の修理と荘々年貢を催促するよう命じた。そこには「仍殊有御沙汰、云修理、云年貢、所被相催也、其内御沙汰荘々注文遣之、殊可令下知給之由、院御気色候也」とある（『吾妻鏡』同年5月13日条）。「六条院領荘々注文」が後白河院から幕府に送られ、頼朝の命によって修理用途と年貢の催促が実施されたのである。その関連史料が、新見文書に残る（信史3-420、鎌503）。

花押

下 六条院御領信乃国千国御荘内於他里飯守所

可早任平康家請文状、進済御年貢布陸拾段本尺事

右件御年貢布、慥任申請、無懈怠可令弁済之状、所仰如件

建久元年十二月 日

僧（花押）

袖判と僧の花押が日下に押されており、領家袖判預所下文の文書形式と一致する。⁽¹⁰⁸⁾花押を押した僧が千国荘の預所で、袖判花押の人物が領家に相当しよう。幕府からの催促によって地頭平康家が請文を作成し領家側に提出された。その後、領家と預所が現地の荘政所に年貢布の弁済を命じたものである。後白河院から幕府を介して地頭に催促がなされ、地頭請文にもとづいて領家側の預所下文が作成され機能した。院と幕府の共同執行である。この平康家については、仁科御厨の治承4年（1180）平盛家（信史3-44）、安貞2年（1228）平康盛（信史4-22）がみえ、永和2年（1376）から天文5年（1536）までの式年遷宮棟札には仁科平盛国、盛房、持盛、盛直・明盛・盛国・盛能が見える。仁科御厨の在地領主は平安末期から戦国時代まで平姓仁科氏が存続し「盛」を通字にしていた。六条院領千国荘の平康家も、鎌倉時代の平姓仁科氏と「康」の一字を共通にしていることから、その一門と推定される。この平姓仁科氏一門が、後鳥羽上皇との密接な関係から承久の乱の一因をつくったことは著名である。この平康家の先祖が千国荘を白河院の六条院領として立荘に関与した可能性が高い。

ここで注目すべきことは、後白河院が頼朝におくった「六条院領荘々注文」にはすべての六条院領があげられていたはずであり、公家・武家両政権が共同して六条院の再建と六条院領荘園の興行

にとりくんでいたことである。信濃国千国荘と同じことが、越後国菅名荘や佐橋荘をはじめとする全国の六条院領でおこなわれていたものと考えられる。こうしてみると、信濃の平姓仁科氏一門も、越後の平姓繁賢流も六条院領の再建・興行に深く関係していたものと考えられる。

六条院領は、承久の乱後、八条院領とともに後高倉院から安嘉門院に伝領された。この安嘉門院は名を邦子内親王といい後高倉院と北白河院陳子との間に生まれた。弘安6年(1283)75歳で死去し同年10月9日安嘉門院五七日の法事が行われた。供米は御領の郡莊家御年貢から院下文によって調進され、人夫は近辺御領の所進であった。その布施・用途を調達した莊園所領はつぎの通りである(『勘仲記』弘安6年10月9日条)。

布施分

尾張富吉荘	今林准后(四条隆衡女)知行	三重
遠江飯田荘	大納言二品源定実知行	三重一裏
河内小高瀬荘	堀川大納言源基具知行	三重三裏
播磨多可荘	花山院大納言長雅知行	三重一裏
丹波栗林西荘		

同東荘

御領用途	繁高	不足分
------	----	-----

用途分

遠江浜松荘	十五貫
加賀山代荘	六貫
三河豊原荘	六貫
越後菅名荘	二貫五百文
越前稻津荘	三貫五百文
上野菅野荘	二貫五百文
摂津田部荘	三貫
美濃古橋荘	二貫五百文
播磨黒田荘	二貫五百文
六条院庁	二貫

これらの莊園は後の室町院領とよく一致し、安嘉門院領が室町院領の基礎となったことがわかる。この二つの女院領については新しい見解が伴瀬明美によって提出されている。⁽¹⁰⁹⁾しかも六条院庁が安嘉門院領として存続しており、莊園と並んでひとつの賦課単位になっている。六条院領越後国佐橋荘や信濃国千国荘はみえないが、越後国菅名荘はここに含まれ、加賀国山代荘・越前国稻津荘など北陸や遠江国浜松荘をはじめとした遠江国飯田荘・尾張国富吉荘・三河国豊原荘など東海地方、上野国菅野荘など関東の所領が安嘉門院領として伝領・継承されていたことがわかる。最近、この安嘉門院領の集積過程を復元した詳細な研究が公表された。⁽¹¹⁰⁾幕府や御家人との関係などについても今後の解明がまたれる。

しかもこの法事用途の不足分については「此外不足、御領用途をもって繁高これを調進す」とあり、繁高が最終調整をしていたことがわかる。この繁高は、繁賢流越後平氏の平度繁の子息で民部

少輔であった。平繁高は院庁官として安嘉門院領の用途調達に従事していた。この繁を通字とする越後平氏諸流が六条院領やそれを継承した安嘉門院領といかに長期にわたって関係していたかがあきらかであろう。

こうしてみると、信濃の千国荘・善光寺平周辺から越後国佐橋荘・菅名荘にかけて、信濃平氏や繁賢流越後平氏が白河院から亀山院政期におよぶ六条院領の形成・維持・展開と密接に関係したことがわかる。この一門が、白河・鳥羽院らと結んで六条院領の設立に深く関係し、北白河院や安嘉門院らの女院庁へも進出し、室町院領の経営にも大きく関与し、公家・武家両政権を結ぶ存在としても活躍していたことがわかる。

むすびに

本稿は、中世の善光寺平における災害と再開発に関する一事例研究である。ここで注目すべき第一は、善光寺平では千曲川・犀川という大河川による洪水災害の常襲地帯に、すでに10世紀には平安の大集落が形成され、千曲川による大洪水で集落が廃絶したこと、しかし、その後も開発領主による定着・再開発が進展し、それを公領として編成しようとする国衙と、御厨に編成しようとする伊勢神宮が対立・紛争を繰り返していた。そこに伊勢平氏が進出し、河川流域の扇状地・低湿地を御厨とし伊勢平氏平正弘の所領として展開した。しかし、正弘一門は保元の乱で頓挫し、後院領として立荘される一方、その子孫が信濃平氏として木曾義仲に抵抗して越後城氏を呼び入れ横田河原の合戦を戦い、その子孫が幕府の御家人として存続していった。

このように河川や三角州など氾濫原に御厨が伊勢平氏によって設立される事例は全国的にもかなり指摘できる。河内平野の大和川と淀川河口一帯の低湿地には御厨子所領河内国大江御厨が成立し、ここに平忠盛が介入した。⁽¹¹¹⁾相模の引地川・境川河口付近にできた鶴沼・菱沼・懷島を中心にした低湿地には、伊勢神宮領相模国大庭御厨が成立し御厨司に平景継・景宗など相模平氏が勢力を伸ばした。荘内に伊介神社が勧請され、内宮禰宜の仮名伊勢恒吉が在地と伊勢神宮の仲介をとり、伊勢上分料が農業経営や再開発に一定の資本投資の役割を果たしていた。⁽¹¹²⁾伊勢神宮領遠江国鎌田御厨では、御厨と国衙の共同開発で用水路の建設が康和年間におこなわれていたことはすでに前述した。この地も遠江国磐田郡太田川河口付近とそこに流れ込む今の浦川が、砂丘地帯の背後にラグーンを形成させ低湿地一帯がひろがっていた。下総国葛飾郡の江戸川河口付近や古利根川流域にかけては、葛西御厨や大河戸御厨が形成された。この地形的環境についても大河川下流域の低湿地帯で築堤技術が重要であったことが指摘されている。⁽¹¹³⁾ここを苗字の地とする葛西清重は、多摩川河口に立地する丸子荘や北上川河口の石巻を含む陸奥国牡鹿郡を所領としており、江戸湾警備の水軍を持っていたという仮説が提起されている。⁽¹¹⁴⁾これまでこうした低湿地や扇状地など大河川の洪水災害の常襲地帯では、古代中世の開発が後れたとみられてきたが、実際にはむしろ平安時代が開発が先行しており、洪水災害からの復興の過程で国衙や伊勢御厨の開発資本が投資され、悪水払い＝排水路建設や築堤技術を主体とした土木技術、浅瀬を築として利用する漁業技術、川船の運行技術など独特のものが必要とされたと評すべきである。伊勢平氏はそうした独自の開発技術を地方に伝播したり、開発資本の供給などにも積極的に関与した可能性が高い。今後も深めてみたい検討課題である。

第二は、善光寺平西側の山麓線にそった複合扇状地では、善光寺のおかれた舌状台地の突端部分をとりまくように等高線上に鐘鑄川という灌漑用水路が開削され、条里水田に灌漑するシステムが平安時代にはつくられていた。そうした地帯では、沢水や地滑りなどによる土砂災害が頻繁に繰り返され、善光寺や用水路の鐘鑄川堰がその被害によって度々埋没した。しかし、ここでもその復興のために国衙権力とともに松尾社や八条院の女房や院司らを介して開発資本が投資され、再開された周辺部の所領が荘園として立券され再編された。鎌倉～室町期には本領主の系譜をもつ越後平氏で御家人平姓和田氏や国人高梨氏によって不足する灌漑用水を補完するために排水を寄せ集めて再利用するため六ヶ郷用水が開削され、地域の開発景観が複合構造をなしていたことを指摘した。

これまで、地方の開発領主は奥深い田舎の在地領主であり、百姓らの小規模開発を領域的に組織したものと説明されてきた。しかし、善光寺平での再開発の主体となった平姓和田氏は越後平氏諸流の一門であり、彼等は院政期から京都で検非違使や院北面として活躍し、繁の字を通字とし、鎌倉幕府が成立するといち早くその御家人となり、公家政権や武家政権に両属しながら京都と関東を往復して政治的にも広範な活躍をみせていた。そのため、その所領展開も信濃や安芸・遠江・越後など数か国に散在させるようになった。伊勢平氏の活躍した平氏政権の時代には同じ平氏として政治権力を利用して権益を拡大し、頼朝が政権を樹立すると平頼盛を縁に頼朝の御家人となったり、上皇や女院庁の北面や女房を通じて公家らとも姻戚関係を結ぶなど政治的動向にきわめて敏感な対応をし、すぐれた政治感覚をもっていた。これまで、こうした伊勢平氏とならぶ平氏諸流の実態や機能・役割についてはほとんど未解明なままである。御家人についても都市領主論が提起されて久しいが、その彼等が地方の所領でどのように開発や災害に取り組み、生産活動を組織していったのか、その徴税や収納活動を展開していたのか具体像はあきらかになっていない。善光寺平の災害と再開発の検討を通じて、田舎の開発に政治権力に敏感な伊勢平氏や越後平氏諸流が深く関与しており、公家政権や武家政権との密接なつながりのあった歴史の一端を不十分ながらあきらかにすることができたと思う。田舎の地域史が公家・武家政権の政治史と密接な関係にあったことが窺われる。

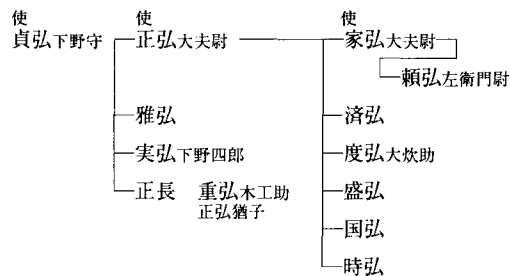
しかし、あきらかになったことはわずかであり、むしろ新しい疑問が噴出する。本稿でみたように伊勢平氏の平正弘流は伊勢から信濃・越後に所領を獲得していたし、繁を通字とした越後平氏諸流の一門も、京都を本拠としながらも信濃・越後・遠江・安芸に所領を展開させていた。これらの地域は、フォッサマグナにそって日本列島を縦断する大地溝帯と一致する。あらためて京都・東海・鎌倉・関東・甲信越・北陸・京都という列島の内陸循環をめぐる物資流通網に依拠した政治勢力の展開を災害や開発・生産活動と結び付けて再検討してみる必要があるように思う。最近、新田英治はこれまでの東国・西国論を批判的に検討し、鎌倉と京都や関東・奥羽間での財物、所領からの所出物などの恒常的な流れ・流通構造が信用経済を支え、中世後期には地域ブロック経済を形成する趨勢があったのではないかと重要な問題提起をしている。⁽¹¹⁵⁾

越後平氏諸流のように鎌倉御家人でありながら院北面や女院女房などを搬出した京方御家人層がもっていた都鄙間を結ぶ循環論的で重層的なネットワーク。持明院基家一門のように、京都の公家でありながら平信繁一門や豊前守護大友氏ら御家人と姻戚関係を結び、鎌倉將軍家の月卿雲客として京都・鎌倉や全国の散在所領を重層的に結ぶ人的ネットワーク。伊勢上分料や熊野・日吉社の初穂料などが、地方における災害復興や用水路の維持・管理などに必要な開発資本として現地で再投

資されている金融・資金の循環構造。そうしたものが、どのように相互に関連をもちながら地域経済圏の中で機能していたのか、そこが解明されなければならない。年貢や公事も田舎から一方的に京都・鎌倉に収奪され片務的で一方通行的な物流をつくっていたのではあるまい。京都・鎌倉にすべての年貢が運上・貢納されたのではなく、途中で再投資され、利殖や利鞘を稼ぐ出挙や借錢などに出され、地方における生産活動や地方金融や災害復興資金など多様な債務関係に活用された循環構造が解明されなければならない。いずれも今後の研究課題としたい。

註

- (1)——「北信濃の社会と生活」『長野市誌 第2巻・歴史編 原始古代中世』（長野市，2000，拙者執筆分）
- (2)——建設省北陸地方建設局信濃川工事事務所編『信濃川の氾濫—江戸時代』（同，1982）。長野県教育委員会編『歴史の道調査報告書 千曲川』（同，1991）。
- (3)——「中世の自然と産業」『長野県史通史編2 中世1』（長野県史刊行会，1986，拙者執筆分）。
- (4)——「川中島平の開発と伊勢神宮領御厨」（長野県土地改良史編集委員会編『長野県土地改良史 第1巻 歴史編』長野県土地改良事業連合会，1999）。
- (5)——河西克造「中部高地の水田遺構 長野県川田条里遺跡」（『季刊考古学』37，1991），臼居直之「善光寺平の水田遺跡の調査」（『考古学ジャーナル』365，1993）。
- (6)——伝田伊史「地域における古代史研究をめぐって」（『歴史学研究』703，1997）。
- (7)——「皇太神宮建久已下古文書」（『信濃史料』第3巻，434頁），以下，信史3-434と表記する。
- (8)——海津一朗「東国・九州の郷と村」（『日本村落史講座 2 景観』雄山閣，1990）。
- (9)——『南宮遺跡発掘調査概報』（平成7年度分まで）（長野市埋蔵文化財センター，1996）。
- (10)——栗岩英治編『長野県町村誌』（長野県，1936）。
- (11)——拙稿「東国における摂関家領荘園の構造」（『日本中世の国政と家政』（校倉書房，1995。初出は1974）。
- (12)——栗岩英治『信濃荘園の研究』（同，1935）。長野県『長野県史通史編2 中世1』（長野県史刊行会，1986）。
- (13)——『上中堰の歴史』（上中堰土地改良区，1986）。
- (14)——『長野県埋蔵文化財センター年報』（長野県埋蔵文化財センター，1995）。
- (15)——『長野県埋蔵文化財センター年報』前掲書。
- (16)——『日本城郭大系 長野・山梨』（新人物往来社，1980）。
- (17)——大音文書『長野県史通史編2 中世1』前掲書，405-6頁。
- (18)——大庭御厨古文書 平2548。五味文彦『院政期社会の研究』（山川出版社，1984）。
- (19)——南出真助「中世伊勢神宮領荘園の年貢輸送」（『人文地理』3-15，1979）。
- (20)——綿貫友子「遠江・駿河国における湊津と海運」（『中世東国の太平洋海運』東京大学出版会，1998）。
- (21)——高橋昌明「日本中世の戦闘」（『武士の成立武士像の創出』東京大学出版会，1999）。
- (22)——青山幹哉「中世系図学構築の試み」（『名古屋大学文学部研究論集 史学』39，1993）によれば，棟梁級の氏名読みは「天皇の後胤」の姓からはじめるが，中小武士は，自分に近い先祖の名からはじめるという。富部三郎家俊の氏名読みは後者に該当する。
- (23)——『吾妻鏡』建仁2年4月13日・同5月20日・同6月25日条。
- (24)——五味文彦「武家政権と荘園制」（『講座日本荘園史2 荘園の成立と領有』吉川弘文館，1991）。
- (25)——田中文英「平氏政権の形成過程」（『平氏政権の研究』思文閣出版，1994）。
- (26)——高橋昌明『清盛以前』（平凡選書，1984，284頁）。
- (27)——元木泰雄『藤原忠実』（人物叢書，2000，吉川弘文館 107頁）。
- (28)——中条家文書の『平氏諸流系図』によれば，



とある。『分脉』にはなく『兵範記』記載の盛弘・時弘が，正弘の子息として記されている。この系図の史料批判および書誌学的検討については後述する。

(29)——最近、高橋昌明『前掲註(21)書』は、これまでの武士像が近代歴史学の偏光を受けていたことをあきらかにし、平安貴族も武官の要素を濃厚にもっていたこと、武士や武家風俗が中央の儀礼的武士の影響下で形成されていたこと、など興味深い論点を鮮明に打ち出している。鎌倉時代の騎兵の特徴とされる保呂という武家風俗が、鳥羽院の武士御覧の中で生まれていたことは、高橋説に有利である。とりわけ、「為御流矢云々、永久之比、南都衆徒合戦之日、叔父重時朝臣郎従着此布云々」とあり、源重成郎等らが保呂を着したのは流矢をさけるため、永久年間に叔父重時が南都衆徒との合戦で身に着したのが最初であったとある。地方から動員された一族・郎従郎等らの武士団の風俗も、南都の僧兵との戦闘であたらしい防御技術が生まれ、それが普及していたことがわかっておもしろい。

(30)——稲本紀昭「建久三年伊勢神宮領注文と神鳳記」(『史林』68-1, 1985)。

(31)——五味文彦『院政期社会の研究』(山川出版社, 1984, 188頁)。

(32)——後藤みち子「武家の乳母と乳母夫」(『鎌倉』85, 1997)。

(33)——石井進「矢原御厨についての古文書の解説」(『信濃』47-2, 1985)。この論考は『長野県史通史編』の拙者執筆分当該部分の誤りを指摘し、藤原家信が中原氏であること、官使による立券を論証しえないことを指摘している。そのように訂正したい。

(34)——牛山佳幸「源平争乱と北信濃」(『長野市誌 第2巻 歴史編』前掲書, 488頁, 2000)。なお、高橋昌明『清盛以前』(前掲書, 74・75・82頁)は、貞衡の系統が安濃津・鷺尾・富津・桑名など伊勢の地名を名乗ることから伊勢平氏の本流とする村井康彦・安田元久らの説を批判し、『分脉』が維綱を清綱の子とするのは誤りで忠盛と同世代でむしろ貞清の子とすべきだとする。しかし、維綱系と正弘系との関係については触れていない。また鷺尾を多度山南面の尾根の名として指摘するが疑問である。

(35)——拙稿「北信濃の荘園と御厨」(『長野市誌 第2巻 歴史編』前掲書)。

(36)——本郷恵子『中世公家政権の研究』(東京大学出版会, 1998, 69頁)。

(37)——『新潟県史 資料編』善光寺文書2587, 鎌倉遺文2844。この文書の写真本閲覧については、阿部洋輔・上越市史編纂室福原圭一両氏の教示に与かった。

(38)——承久3年当時の地頭下文の正文としては、重要

文化財有光家文書に承久3年11月16日のものが残る(『下関市史』)。閲覧に際しては山口県文書館和田秀作氏の教示をえた。

(39)——拙稿「北信濃の社会と生活」(『長野市誌 第2巻 歴史編』前掲書), 同「室町時代における善光寺平の開発」(『長野県土地改良史 第1巻 歴史編』前掲書)。

(40)——『長野県土地改良史 第1巻 歴史編』前掲書, 74-79頁。

(41)——漂到琉球国記裏文書 信史補164。寶月圭吾「信濃国今溝莊の新史料」(同『中世日本の売券と徳政』吉川弘文館, 1999, 初出は1963)。この秦相久陳状が僧慶政から九条家を経て宮内庁にいたった文書の伝来論は、下郡剛「漂到琉球国記」成立の背景」(『立正史学』86号, 1999)参照。

(42)——栗岩英治『信濃荘園の研究』(1935), 霜田巖『鐘鑄川の話』(鐘鑄堰組合, 1982)も同様の見解をとる。しかし、北条地区の水田が、弘堰などの小中沢と呼称される用水路に灌漑されている事実など現地調査の成果からすれば、中沢堰こそ今溝莊の灌漑体系とせざるをえない。

(43)——「鎌倉時代の社会」(『長野県史 通史編2 中世1』前掲書, 274頁, 写真49)。霜田巖『鐘鑄川の話』(前掲書)も同様の見解をとる。

(44)——岩崎長思「鐘鑄川堰の歴史地理的考察(1)~(5)」(『信濃』1-1・2・5・6・7, 1932), 同「善光寺平の村落史研究」(『歴史学研究』16, 1935)は江戸時代を中心に考察し、栗岩英治『信濃荘園の研究』(1935), 霜田巖『鐘鑄川の話』(前掲書)は中世に言及している。

(45)——福島正樹「古代から中世へ」(『長野市誌 第2巻 歴史編』前掲書)。

(46)——長野市教育委員会『都市計画道路建設事業予定地埋蔵文化財確認調査概要書 県庁大門線追加調査』(長野市埋蔵文化財センター, 1995)。

(47)——拙稿「信州史発見 中世の善光寺門前と発掘調査」(信濃毎日新聞 文化欄 1996年11月19日号)。小山丈夫「長野市花岡平中世石造物群の調査」(『市誌研究ながの』2号, 1995)。

(48)——『長野市誌 第1巻 自然編』(長野市, 1997)。

(49)——『豊野町誌』(豊野町公民館郷土調査部, 1960)。丘陵突端部にある南郷・石村・神代一帯には、地滑り・土砂災害の伝承が伝えられている。

(50)——長野市教育委員会『長野市の埋蔵文化財第38集 三輪遺跡(3)』(長野市埋蔵文化財センター, 1991)。

三輪遺跡では平安時代の土壌のほか、珠洲焼摺鉢、青磁香炉、白磁碗などが出土しており、鎌倉時代の生活面の存在が確認できる。

(51)——『長野市誌 第8巻 旧市町村編』(長野市、254頁、1997)。守田廼神社の南方に、善光寺参詣の古道が走り、そこに現在も旅人の利用した共同井戸跡が残されている。

(52)——「荘園制の解体と郷村の発展」(『長野県史 通史編3 中世2』長野県史刊行会、1987、419頁 図42)。

(53)——信史5-206、小松寿治「信濃国伴野荘諏訪上社神田相伝系図について」(『駒沢史学』39・40合併号、1988)。信濃の得宗領や得宗被官については、湯本軍一「信濃国における北条氏所領」(『信濃』24-1、1972)、山岸啓一郎「得宗被官に関する一考察」(『信濃』24-1、1972)。

(54)——拙稿「得宗の進出と幕府の滅亡」(『長野市誌 第2巻 歴史編』前掲書)。

(55)——湯本軍一「北条氏と信濃」(『長野県史 通史編2 中世1』前掲書、171頁)。

(56)——『古里村誌』(古里村誌編纂委員会、1955)。

(57)——小山丈夫「和田肥前入道と和田氏」(『長野』185、1996)、拙稿「北信濃の社会と生活」(『長野市誌 第2巻 歴史編』前掲書、2000、623頁)。

(58)——拙稿「高梨氏と六ヶ郷用水」(『長野県土地改良史 第1巻 歴史編』前掲書)。

(59)——『新潟県の地名』平凡社。

(60)——『朝陽村誌』1958。

(61)——『朝陽村誌』1958。現在、姓名としても市内に藤倉姓が分布する。

(62)——『長野市誌 第2巻 歴史編』(前掲書、779-782頁)。

(63)——栗岩英治『信濃荘園の研究』(前掲書)。

(64)——市村成人「建武中興を中心とした信濃勤王史攷」(信濃教育会、1938)。

(65)——片山正行「東条荘考」(『須高』24、1987)。

(66)——小口倫司「二条の善光寺参詣について」(『駒沢国文』3、1964)。

(67)——小林計一郎「二条の善光寺参詣について」(『長野』64、1975)。

(68)——羽下徳彦『惣領制』(至文堂、1966)。

(69)——遠藤巖「雄勝郡地頭小野寺氏」(『出羽路』92、秋田県文化財保護協会、1988)。

(70)——小山丈夫「和田肥前入道と和田氏」(前掲註

(57)書)。

(71)——五味文彦「歌人の群像」(『武士と文士の中世史』東京大学出版会、1992)。

(72)——松井茂「越後平氏と城助永」(羽下徳彦編『中世の地域社会と交流』吉川弘文館、1994)。この論考は、『史学雑誌』1994年回顧と展望(104-5、高橋秀樹執筆分)が指摘するように平資成と安倍資成との混同など初歩的な誤りが散見される。しかし、伊勢平氏と区別されるべき平氏諸流の存在に注目し、古記録にその関係者を探ろうとする視点は貴重であり、継承すべき論点は多い。

(73)——高橋昌明『清盛以前』(平凡選書、1986、139頁)。高橋は平貞賢を常陸平氏とする。

(74)——この系図の活字本は、『新潟県文化財調査報告書10 奥山荘史料集』(新潟県、1965)、『中条町史』などがある。両者とも部分的な誤写があるが、特に前者で見逃す事のできない大きな誤りは二点ある。第一は、実繁から線を引いて繁雅をその子息とするが、原本には朱線はない。「式」と判読している文字は原本によれば「或」であり、原本は実繁と繁雅との関係の子息とはしていない。兩人とも実在の人物であるのは本文で指摘した通りであり、両者の関係は今後の研究課題である。第二は、繁継から繁氏・繁村・親繁・繁継を線で結び、その五人を基繁の子息とする。しかし、原本には、基繁から朱線が親繁・繁継に伸び、繁継から朱線は繁氏と繁村にのびる。つまり、基繁の子息は繁継・親繁・繁継の3人、繁継の子息が繁氏・繁村の2人である。

これまで、この系図に本格的に言及した野口実・松井茂は、いずれも『奥山史料集』に依拠している。したがって、『奥山史料集』にもとづいたこれらの諸研究は訂正される必要がある。

(75)——野口実「古代末期の武士の家系に関する二つの史料」(『中世東国武士団の研究』高科書店、1994)。

(76)——この系図の原本調査は2000年3月15日山形大学付属図書館のご配慮で、高橋一樹氏の協力をえて実施することができた。系図は卷子本になっており、縦27.6、横155.6cmで37紙の継紙である。その法料と紙質、墨色、朱色、記載事項などの特徴を整理すれば、次頁の表のとおりである。

この結果、桓武平氏諸流系図は書誌学的にみて大きく三つの部分に区分することができ、現状のものはその三つの部分の書き継ぎであることが判明する。

第一部は、1紙から24紙までに相当する部分で、ほぼ43.0cm前後の均一な紙を使用している。1紙と2紙のみ短いですが、両者をあわせると43.4cmになるから、同

桓武平氏諸流系図

	法料	紙 質	異色・朱色・記載事項
1 紙	10.5	楮斐混交紙（楮・鳥ノ子）	表紙
2 紙	29.6	同	桓武天皇より
3 紙	41.7	同	
4 紙	42.5	同	
5 紙	42.5	同	
6 紙	42.8	同	
7 紙	43.0	同	
8 紙	42.5	同	
9 紙	40.7	同	
10 紙	43.0	同	
11 紙	42.7	同	
12 紙	43.0	同	
13 紙	39.3	楮紙	
14 紙	43.0	楮斐混交紙（楮・鳥ノ子）	
15 紙	42.8	同	
16 紙	42.8	同	
17 紙	42.8	同	
18 紙	43.0	同	
19 紙	42.6	同	
20 紙	43.0	楮紙	
21 紙	42.1	楮斐混交紙（楮・鳥ノ子）	
22 紙	42.5	同	
23 紙	36.0	同	
24 紙	42.5	同	豊島清秀まで
25 紙	13.0	楮紙（厚手）	異筆，ベンガラ朱，三浦介良文より
26 紙	36.5	同	
27 紙	38.8	同	
28 紙	21.0	同	
29 紙	21.2	同	
30 紙	13.2	同	異筆，三浦有綱より
31 紙	50.5	同	
32 紙	50.2	同	
33 紙	50.3	同	
34 紙	50.2	同	
35 紙	50.0	同	正資（寛文 6 出生）まで
36 紙	95.0	泥紙	異筆，親資（正徳 2 出生）より
37 紙	100.0	同	清資（明治 8 誕生）まで

一紙の利用と考えられる。13 紙と 20 紙のみが叩解の良い薄い楮紙であるが、それ以外はすべて斐紙の多い楮紙との混交紙である。この交ぜ紙は、漉き斑が顕著であるが、薄手で照りがあり、斐紙特有のカサついた張りがある。この部分の筆字は一筆と思われ、墨も第二部のものより薄墨でより青墨に近い。子息、兄弟であることを示す朱線も、より黄色味のある朱を用いている。紙面へ

の墨の乗りが悪く、田中稔（『中世史料論考』吉川弘文館，1993，105 頁）が指摘したような墨をはじいた部分が随所にみられる。この部分の記載人物は、すでに本文中で指摘したごとく、鎌倉末期までの人物であり、三部からなる系図の中ではもっとも古い時期に書写されたかなり良質の系図と考えられる。鎌倉末から南北朝期，14 世紀ごろの作成にかかるものかと考えられる。

第二部は、25紙から35紙までの部分である。いずれも楮紙で横幅の不揃いな切紙を継いでいるが、31紙から35紙は50.3cm前後の大きめの紙を利用している。この部分の記載内容は、三浦介良文からはじめて三浦和田氏の系図が主体であるが、三浦和田定資から弾正左衛門藤資の間に、鎌倉・常陸多気・仲野親王系・本康親王系・是貞親王系の系図を挟み込んでいる。三浦和田系図は、高井のほか羽黒、黒川、南条らを含んでおり、書写した筆も、三浦和田定資以前の筆と弾正左衛門藤資以後の筆は異筆であり、後者はのちの追筆と判断される。第二部の前半部分の記載人物について、高橋一樹氏の教示によると南北朝から室町期の人物に及んでいる。後半部分では戦国期から寛文6年8月3日出生の正資まで掲載されている。室町後期・戦国期の紙を用いた系図で、後半部分は江戸時代初期に余白をつかって追補したものと考えられる。

第三部は、36紙から37紙の2紙のみであるが、楮紙に白泥を交ぜたいわゆる泥紙で、屏風などにもちいた泥間似合紙である。正徳2年誕生の親資から明治8年誕生の清資までを記載し、あとは余白としている。

以上から、この系図は、第一部鎌倉末から南北朝、第二部室町から戦国、第三部江戸前半から明治の三つの時期に編纂されたものを継いだものといえる。

したがって、第一部に相当する部分に掲載された平氏諸流系図は、書誌学的検討からも鎌倉末期から南北朝期に作成・編集されたものと考えられ、『尊卑分脉』よりも古く鎌倉時代の考察には信憑性の高いものと評価することができよう。

(77)——小松茂美「右兵衛尉重康はいた」(『水茎』6, 1989, のちに『小松茂美著作集』20, 1998, 旺文社)に史料紹介されている。

(78)——福田以久生「安楽寿院領荘園について」(『古文書研究』9, 1975)

(79)——「四条院御葬礼記」群書類従第29。この史料は前半部分が仁治4年(1241)の四条院葬礼記、後半が貞応2年(1223)後高倉院葬礼記にあたることを、福田以久生(前掲註(78)論文)があきらかにしている。

(80)——井上宗雄「阿仏尼伝の一考察」(『鎌倉時代歌人伝の研究』風間書房, 1997), 五味文彦「歌人の群像」(前掲註(71)論文)

(81)——本郷恵子「院庁務の成立と商工業統制」(『中世公家政権の研究』東京大学出版会, 1998, 71頁)。本郷はこの平信繁について細工所との関係をのべるにとどまる。

(82)——真経寺所蔵法華経裏文書 鎌4537・4543・4544。

(83)——本郷和人「九条道家の執政」(『中世朝廷訴訟の研究』東京大学出版会, 1995, 65頁)。

(84)——井上宗雄「阿仏尼伝の一考察」(前掲註(80)論文)

(85)——福田秀一解説・校注「うたたね」(『中世日本紀行集』新日本古典文学大系, 岩波書店, 1990), 岩佐美代子校注「十六夜日記」(『中世日記紀行集』小学館, 1994)。

(86)——五味文彦「歌人の群像」(前掲註(71)論文)

(87)——田渕旬美子『阿仏尼とその時代—『うたたね』が語る中世』(臨川書店, 2000)。小川綱志氏の教示をえた。

(88)——この古文書は京都大学所蔵の古文書集にあり、中村直勝「室町院領」(『南朝の研究』星野書店, 1927のちに『中村直勝著作集』淡交社, 1978, 320頁)がその存在を紹介し、鎌倉遺文には未収であったが、『岡山県史 史料編』1310号として活字化された。高橋一樹氏の教示を得た。

(89)——川端新「荘園所職の成立と展開」(『荘園制成立史の研究』思文閣出版, 2000)は、公家領において本家が補任する預所職が荘園領有構造の基本であって、領家職・本家職は鎌倉時代になって登場するもので後に荘園所職が何らかの変質を遂げたものと想定している。この川端の問題提起は試論の域を出ないものであるが、中田薫以来の職の体系論を根本的に見直そうとする重要な分析視点と考える。平安～鎌倉初頭に領主職とあるものが、亀山・後宇多院政期に領家職として再登場する事例も、そうした視点から再検討されなければならない。

(90)——市沢哲「鎌倉後期の公家政権の構造と展開」(『日本史研究』355, 1992), 海津一郎『中世の変革と徳政』(吉川弘文館, 1994), 本郷和人『中世朝廷訴訟の研究』(東京大学出版会, 1995)。

(91)——拙稿「鎮西島津荘支配と惣地頭の役割」(『日本中世の国政と家政』校倉書房, 1995, 初出は1977)。最近、高橋昌明や元木泰雄『武士の成立』(吉川弘文館, 1994)などにより武士論の見直しが進展している。しかし、川合康『源平合戦の虚像を剥ぐ』(講談社メチエ, 1996)があきらかにしたように、鎌倉初期の御家人が、「軍中將軍の令を聞き、天子の詔を聞かず」という軍事的要請による非常時の編成原理から出発し、平時に対応する鎌倉御家人制に転換・再編成されたことはあきらかである。その平時の鎌倉中期・後期の御家人の存在形態

は、武士論の盛業にもかかわらず具体的な研究が後れたままで、武家政権にのみ奉仕する鎌倉初期御家人像がそのまま踏襲されている。鎌倉中期・後期の御家人像の究明のためにも、公武政権に両属した京方御家人の分析概念が重要だと考える。

(92)——藤本孝一「北白河院藤原陳子消息について」(『古代文化』34-11, 1982), 湯之上隆「北白河院藤原陳子とその周辺」(『日本歴史』483, 1988)。

(93)——拙稿「中世の国政と家政」(『日本中世の国政と家政』校倉書房, 1995, 初出は1992)。

(94)——近藤成一「内裏と院御所」(五味文彦編『中世を考える 都市の中世』吉川弘文館, 1992)。

(95)——高橋昌明『武士の成立武士像の創出』前掲書。

(96)——阿部猛「大徳寺領信濃佐久郡伴野荘」(『中世日本荘園史の研究』新生社, 1973)。

(97)——岡田清一「葛西御厨小考」(『東北福祉大学紀要』4, 1980)。

(98)——鈴木敏弘「下総国葛西御厨の成立と伝領」(『日本社会史研究』23, 1987), 長塚孝「鎌倉・室町期の葛西地域」(葛飾区郷土と天文の博物館編『下町・中世再発見』1993)。

(99)——荻野正博「荘園と国衙領」(『新潟県史通史編1 原始・古代』新潟県, 1986)。

(100)——寛雅博「続・関東御領」(石井進編『中世の人と政治』吉川弘文館, 1988)。

(101)——寛雅博「武家領」(『講座日本荘園史2』吉川弘文館, 1991)。この寛があきらかにした将軍家に奉仕した月卿雲客の存在形態の究明は、鎌倉中後期の公武両政権の一体化と内部抗争激化の両面を解明するためにもきわめて重要な検討課題と考える。

(102)——松井茂「越後平氏と城助永」(羽下徳彦編『中世の地域社会と交流』前掲書)。

(103)——龍巖「六条院領と平正盛」(『平安時代』春秋社, 1962)。

(104)——田村裕「佐味荘の成立」(『吉川町史』第1巻, 1996)。

(105)——高橋一樹「平安末期・鎌倉期の越後と佐渡」(田村裕・坂井秀弥編『中世の越後と佐渡』高志書院,

1999) 参照。丸山仁「越後国における王家領荘園の形成」(『新潟史学』45, 2000) も高橋説を踏襲し付随的事柄を指摘している。

(106)——白河院が夭折した六条院郁芳門院のために建立した御願寺・無量光院領の立荘も白河院により「荘券契を尋ねる」ことが行われ、六条院女房の宣旨蓮妙、本主出羽権守能輔らが関与していた(醍醐寺雜事記)。御願寺の立荘・相折帳との関係・院・女院の縁辺人々の役割等の諸点は川端新「院政初期の立荘形態」(『前掲註(89)書』, 初出は1996) 参照。御願寺荘・相折帳については佐藤健治『中世権門の成立と家政』(吉川弘文館, 2000) も川端説を踏襲する。

(107)——『長野県史通史編2 中世1』(1986, 拙者執筆分) ではこの一条院女房を八条院女房の誤りと推定した。『新潟県史通史編1 原始・古代』(1986, 荻野正博執筆分) でも八条院女房とし、『玉葉』治承2年7月28日条から肥後守資隆女にあてて見解を紹介している。

(108)——拙稿「荘園公領の支配」(峰岸純夫編『今日の古文書学 第3巻』雄山閣出版, 2000)。

(109)——伴瀬明美「院政期～鎌倉期における女院領について」(『日本史研究』374, 1993), 同「鎌倉時代の女院領に関する新史料」(『史学雑誌』109-1, 2000 参照)。

(110)——野口華世「安嘉門院領と女院領荘園」(『日本史研究』456, 2000)。七条院領について布谷陽子「七条院領の伝領と四辻親王家」(『日本史研究』461, 2001) 参照。

(111)——西岡虎之助『荘園史の研究』岩波書店, 1953-56, 戸田芳実『初期中世社会史の研究』東京大学出版会, 1991)。

(112)——この一帯の地形復原については、藤沢市教育委員会『大庭御厨の景観』(同, 1998) 参照。

(113)——湯浅治久「中世葛西地域における若干の考察」(入間田宣夫編『葛西氏の研究』名著出版, 1998, 初出は1986)。

(114)——入間田宣夫「葛西氏とその家臣団」(『葛西氏研究』11, 1993)。

(115)——新田英治「中世後期, 東西両地域間の所領相博に関する一考察」(『学習院史学』37, 1999)。

(国立歴史民俗博物館歴史研究部)

(2000年3月5日受理, 2001年9月4日審査終了)

Natural Disaster and Development in the Zenkoji Plain in Medieval Times: The Ise and Echigo Taira Clans as Development Authorities

IHARA Kesao

In this paper, the author will attempt to present a systematic view of the history of development and natural disaster in two contrasting regions of the Nagano Basin, the large river's flood plain and alluvial fan and foothills. He will also examine the unique historical conditions of natural disasters and development authority in medieval times concentrating on the leaders who affected development.

It is thought that development was delayed on the flood plain and that most new rice paddy development occurred in recent times. However, development that occurred prior to the tenth-eleventh century has been verified by archaeological studies conducted on the occasion of large-scale development in recent years and general regional historical research, such as studies of feudal manor sites, which focused mainly on irrigation and place names. Even after flood damage from the large river occurred, there was a rivalry between a movement to organize the shrine estates that continued to use Ise Jobun rice as development capital for investment and reconstruction and a movement to reorganize the feudal domains allied with government authorities. It is indicated that the family of Taira Masahiro of the Ise Taira clan played a large role as a development authority.

On the other hand, in the area stretching from the foothills to the alluvial fan, the land was previously used for Jori system rice paddies using the ancient Kanai River. However, the maintenance and reconstruction of Jori system paddies by the government authorities became difficult as the Kanai River was repeatedly buried in earth and sand from natural disasters in the ninth and tenth centuries. In the period of the government by ex-Emperors, the authority, which commanded the officials of the Rear Offices, joined with the development authorities to restore and lengthen the Kanai River, and the estates of Matsuo Shrine and the former emperor Hachijou were constructed on redeveloped land in the area. Furthermore, in the Kamakura to Muromachi periods, the Wada clan, *gokenin* (immediate vassal of Shogun) of the Taira line, and *kokujin* (native lord) Takanashi clan dug a secondary supplementary irrigation system known as "Rokukagou irrigation" in the outlying areas of non-Jori style rice paddies and repeatedly exerted authoritative power to expand development of new areas. The development authorities in-

dicated that the clans of Taira lineage in Echigo who had been active as soldiers for the Regent's north guard and warriors of the mother of the Emperor and also produced Kamakura *gokenin* should be seen as *gokenin* in Kyoto.

It can be said that the background of development in these areas had a compound structure based on the disparities in those leading the development and the changes of each era.